平成18年度
子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開―父親の活動をめぐって―
調査研究報告書

少子・家庭政策研究所

（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構

平成18年度　子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開―父親の活動をめぐって―　調査研究報告書

（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構

ま　え　が　き

この報告書は、平成 18 年度に少子・家庭政策研究所が実施した「子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開」に関しての調査研究の成果をまとめたものであります。当研究所は、平成 18 年 4 月より、これまでの「家庭問題研究所」という名称を「少子・家庭政策研究所」に改めることになりました。

当研究所では、その名称を変更する以前から家庭や地域における子育てに関しての研究を数多く実施してきました。たとえば、「地域における子育て支援についての調査研究」「核家族における育児援助に関する調査研究」「家庭におけるしつけに関する調査研究」、そして「親の子育て観とその実態についての調査研究」などであります。しかしながら、それらはどちらかというと子育てが基本的には家族のなかだけで行なわれるものという考えのもとに調査研究が行なわれてきました。また、往々にして調査対象が母親中心になる傾向にありました。

今回の調査研究は、まったく新しく、それらとは異なって父親たちを中心に、しかも父親たちが家庭や地域に戻って、父親としての本来の姿をとり戻すにはどのようにすれば良いのか、そしてそのことが可能かどうかを中心にした調査研究を実施してみることにしました。それには近年、父親の家庭あるいは地域への回帰現象が顕在化しつつあると言われ出しているという事実があるからでもあります。

そこで、現代の若い父親たちの子育てに関する意識や実践活動に焦点を合わせながら、父親と子どもたちとのコミュニケーションにとって求められているものを検討しつつ、地域において展開しはじめている父親たちへの行政や NPO やボランティア・グループが展開する多様な取り組みと、県内の各地において実際に展開しはじめている「父親の会」についての面接調査を行なってみました。

詳細な調査結果については、ぜひ本書を一読していただきたいと存じますが、まず父親を対象にした行政や NPO やボランティア・グループの多様な取り組みについての調査では、それらの取り組みが父親と子どもとのかかわりの場を提供し、コミュニケーションのきっかけを提供してきていることが明らかになりました。また全国でも活発化してきている「父親の会」についての調査では、PTA 活動から発展したものが多いようですが、子どもの教育だけでなく、地域活動にも積極的に関与してきており、今後の展開が大いに期待されるものであると言ってよいでしょう。

最後になりましたが、インタビューに快く応じていただきました皆様に、そして今回の調査にご協力くださいました方がたに心から御礼を申し上げます。皆様のご協力がなければ、このような報告書は完成しませんでした。この場をかりて厚く御礼を申し上げます。

平成 19 年 3 月

少子・家庭政策研究所
所長　野々山　久也

研　究　体　制

研究責任者	野々山　久也	少子・家庭政策研究所所長 甲南大学文学部教授
研究者	二階堂　裕子	少子・家庭政策研究所主任研究員 大阪市立大学文学部非常勤講師
	齋藤　優子	少子・家庭政策研究所特別研究員 生活協同組合コープこうべ

子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開
―父親の活動をめぐって―

第１章　家族とコミュニティ 3
第１節　はじめに 3
第２節　現代の子育て期の家族をめぐる状況 3
1．家族の「多様化」 4
2．家族の「個別化」 4
3．家族間における「不平等化」 5
第３節　コミュニティへの期待 6
第４節　現代の父親と家族の関係 8
第５節　現代の父親とコミュニティの関係 15
第６節　本書の目的と構成 17
第２章　父親の子育て参加を支える取り組み 19
第１節　はじめに 19
第２節　調査の概要 19
1．調査方法 19
2．調査対象の選出 20
3．調査時期 20
4．調査対象の属性 20
第３節　インタビュー事例 21
1．行政の取り組み 21
2．NPOなど民間での活動 24
3．男性のボランティア活動 30
第４節　インタビュー調査のまとめと考察 32
1．インタビュー調査に見る子育て期の父親と子どもの関係、夫婦の関係の現状 .. 32
2．取り組みの成果 34
3．今後の課題 35
4．まとめ 36
第３章　コミュニティにおける父親の連帯 38
第１節　はじめに 38
第２節　調査の概要 39
第３節　「父親の会」の結成 43
1．もっと父親を学校へ 43
2．父親同士の関係作り 44
3．地域の子どもたちのために 45
第４節　「父親の会」の活動内容 46
1．親子で行なう活動 46
2．父親のみで行なう活動 50

第 5 節　家族との関係 53
1．広田正明さんの事例 53
2．父親の役割を考える 54
第 6 節　学校との関係 55
1．白石孝介さんの事例 56
2．妻や子どもと関心を共有する 57
第 7 節　コミュニティとの関係 58
1．河合圭吾さんの事例 58
2．コミュニティで子どもを守る 60
第 8 節　「父親の会」の活性化を促す要因 61
1．「父親」となる勉強の場 61
2．コミュニティにおける活躍の場 62
3．新しい世界の広がり 63
第 4 章　子育て期の家族の支援に向けて 65
第 1 節　はじめに 65
第 2 節　父親と子どもの関係作り 65
第 3 節　コミュニティにおける子育て期の家族の支援：「父親の会」の可能性 66
第 4 節　提言 67

第 1 章　家族とコミュニティ

第 1 節　はじめに

今日、父親の「家庭回帰現象」が顕在化しつつあるといわれている。

その象徴ともいえるのが、既存のものとはやや趣向の異なった子育て雑誌に対する人気の高まりである。判明しているだけでも、2005 年 11 月から 2006 年 3 月の約半年間に 4 誌が相次いで創刊された。これらの雑誌が主な読者として想定するのは、未就学児や小学生の子どもをもつ親である。各誌を見比べてみると、親子による遊びを主に取り上げるものや、勉強および受験に関する情報を提供するものなど、その内容に若干の差異はあるものの、勉強も遊びも「親子で一緒に取り組む」という姿勢を重視している点は共通している。また、母親だけではなく、父親にも読まれることを強く意識した紙面作りも、4 誌に共通した大きな特徴である。

こうした子育て雑誌に関心が集まる背景には、親子で過ごす時間を大切にする教育熱心な両親が少なくないことや、子育てに対する不安が高まっているという現状があるようだ（朝日新聞 2006 年 11 月 11 日朝刊）。ここからは、積極的に育児を担い、そこで生じる課題と正面から向き合おうとする父親たちの姿が浮かび上がってくる。

こうした現状把握のもと、本研究では、現代における父親の子育てに関する意識や実践活動に焦点を当てながら、父親と子どものコミュニケーションを図るうえで必要となるものについて検討する。とりわけ、コミュニティで展開する諸活動の役割に注目し、それが家族や家庭にどんな影響を与えているかについて考察を加える。

具体的な事例を取り上げる前に、本章では、まず第 2 節で、現代の子育て期の家族の様相を概観しながら、どのような問題が生じているのかを明らかにしたい。家族の諸問題を解消するために、今日、家族を取り巻くコミュニティへの期待が高まっている。そこで、続く第 3 節では、コミュニティが果たすべき役割とは何かについて、先行研究の議論を簡単に整理する。次に、本研究でとりわけ父親に焦点を当てる意義を明確にするため、まず第 4 節で現代の父親と家族の関係について、その後第 5 節で父親とコミュニティの関係について、それぞれその現状と課題をまとめる。最後の第 6 節では、本研究で取り組むべき課題を明らかにし、本研究の構成を簡単に説明したい。

第 2 節　現代の子育て期の家族をめぐる状況

家族は、いうまでもなく、大多数の人々にとって最も基本的な生活の場である。人はそこに生まれ落ちた後、より広い社会で生きていくために必要となる知識・技能・規範などを学び、やがて自らが新しい家族を形成する。

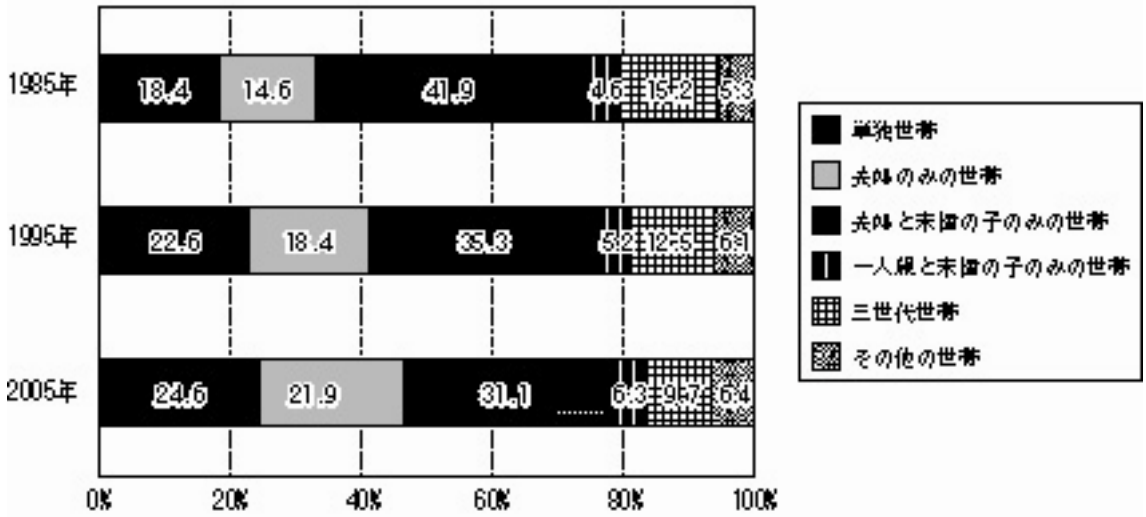
ここでは、現代の家族について、子育ての視点からその課題を探ることにしよう。

1. 家族の「多様化」

現代の家族を見渡してみると、その形態や家族に対する意識は決して一様ではない。結婚ひとつを例にとっても、結婚して子どもをもうけることを望むカップル、婚姻という法的な手続きをとらない事実婚を選択するカップル、また最近では、同性同士の結びつきを求めるカップルが見られるなど、その形態は多岐にわたっている。また、子育て期の家族との関連でいえば、「夫婦と未婚の子のみの世帯」が減り、「一人親世帯」が増えている。厚生労働省が行なった「平成 17 年国民生活基礎調査」における世帯構造別構成割合をみると（第 1-2-1）、1985 年の「夫婦と未婚の子のみの世帯」は 41.9%であったのに対し、2005 年では 31.1%まで減少した。一方、「一人親と未婚の子のみの世帯」は 1985 年の 4.6%から、2005 年の 6.3%へ上昇している。この比率自体は、この時期に世帯総数が約 1000 万世帯近くも増えたことによって、それほど大きく変化していない。しかし、世帯数では 1985 年の 171 万 8 千世帯から 2005 年の 296 万 8 千世帯へと拡大しており、この 20 年間に 1.7 倍にも膨れ上がっていることがわかる。さらに、三世代が暮らす世帯の割合も大きく減っていることが見て取れる。

このように、ますます多様化が進む現代の家族を捉えることは、それほど容易ではない。これまで子育て期の家族として暗黙の前提とされてきた「夫婦と未婚の子」という「標準的な家族モデル」の妥当性が低くなったことだけは確かだろう。

第1-2-1図 世帯構造別の構成割合



出所：厚生労働省「平成17年 国民生活基礎調査」より作成

2. 家族の「個別化」

家族における「個別化」の進行も、今日の家族変動の大きな特徴である。

礒田と清水は、「個別化」を「個人や集団の欲求充足を図る社会参加活動の単位が選択的により小さいものへと移動すること」（礒田・清水 1991:18）と定義した。その上で、礒田は調査データの分析から家族関係と個別化の関連を考察している。礒田によれば、個別化の進行が「愛情で結ばれた家族の中で、非カテゴリー的な接触を確保し

て、『私』のアイデンティティーの確保を可能にする反面、結婚の不安定化につながるといったマイナスの可能性もはらんでいる」（礒田 1996:20）という。そして、「たゆまない、安定のための努力とシステム維持の努力を求められる家庭には、むしろ、そこが重要な領域と認知されていればいるほど、重い課題遂行的社会の性質をおびるというジレンマが隠されている」（礒田 1996:20）と指摘した。

また、野沢慎司もこうした個別化の進行によるパーソナル・ネットワークの拡大と夫婦関係について検討を加え、大都市に居住する家族の多くは夫婦が個別に世帯の外で築く新たなネットワークへ取り囲まれており、それによって夫婦間の性別分業が構造的に補強されている可能性があると述べた（野沢 1995）。

夫婦をはじめとする個々の家族成員が、主体的な生き方を保障されつつも理想とする家族関係をいかに形成していくかが問われているといえよう。

さらに、礒田は個別化について、「同質社会の共通の家族観からの拘束力の低下であり、そこからの解放と結びついているが、裏を返せば、共通の家族観という指針を失い、各自が家族のもち方について主体的に関わっていかなければならない状況を意味している」（礒田 1996:21）と指摘した。

夫婦関係と個別化について検討した長津も、「個人単位の活動を維持すると同時に夫婦としての絆をいかに築いていくかが問われる時代になっている」（長津 2004:21）と述べている。これは、夫婦間に限らず、親子関係についても当てはまることだろう。つまり、個別化が進むことによって、人々は家族に関する規範やそこで各成員に期待される地位－役割から自由になる代わりに、目指すべきモデルを見失い、自らそれらを構築していかなければならなくなったのである。

子育てについても同じことがいえるのではないか。冒頭に述べたような、昨今の子育て雑誌に対する人気の高まりは、育児について相談できる人が周囲にいない、もしくは限られているという事情とともに、手本となる「子育てモデル」を誌面から懸命に拾い出したいという欲求の強さを明示していると捉えることができるだろう。

3. 家族間における「不平等化」

今日の経済における変化が家族生活に与える影響も無視できない。白波瀬佐和子は、1990 年代以降の本格的な低成長経済の中で、日本全体の所得格差は拡大したのか否かについて議論している。1986 年、1995 年、2001 年の各年齢層内におけるジニ係数[1]を比較すると、高齢層では年々経済格差が縮小してきたのに対し、20 代・30 代を中心とした若年層では格差が拡大していることが明らかとなった。また、若年層における低所得の割合が、1986 年の 21%から 2001 年の 42%へと倍増したことから、若い世代の経済的リスクが大きく上昇していることも示された。さらに、世帯構造とジェンダーによる不平等に目を向けると、高齢女性の単独世帯や母親一人世帯は、高い経済的リスクを負っていることがわかった（白波瀬 2006）。

また、日本企業における近年の雇用流動化が家族と企業間の関係にもたらした変容

[1] ジニ係数とは、所得格差の程度を表す代表的な指標で、完全平等からのズレを指す。ジニ係数がゼロに近いほど所得分布は平等で、逆に数値が大きくなるほど不平等であることを示す。

を考察した木本喜美子の研究でも、類似した問題が指摘されている。すなわち、「バブル経済の崩壊後、若年層が雇用の犠牲者となり、また低賃金の女性非正社員の増加が激しく進んだ」（木本 2006:22）。さらに木本は、これまで女性非正社員の多くは既婚女性であったが、現在はシングルマザーが少なくなく、経済的自立の道から遠ざかっているが、その一方で、男性壮年期層はあいかわらずの長時間労働を担い、企業への高いコミットメントを発揮していると述べた（木本 2006）。

これらの議論から、昨今の経済状況の中で、子育てに奔走する世代の就業環境が悪化しており、生活の経済的基盤を揺るがしていること、そして、子育て期にある家族内部においても格差が生じ、不平等さを増していることが見て取れる。また、とりわけ母親一人世帯が経済的苦境にさらされやすい現状を理解することができる。

本田由紀は、家庭教育の重要性が喧伝される風潮にあって、もっともこれに敏感に反応するのが教育熱心で諸資源に余裕のある母親たちであり、一方で生活苦から子どもの養育責任の放棄に至りがちな母親はこれに応じようとしないと述べ、さらに格差を助長させる可能性があることを指摘した（朝日新聞 2007 年 1 月 16 日朝刊）。ここで本田が、「むしろ必要なのは、家庭外に、家庭間の格差を最大限補完する機会を、公的に充実させることだ」と述べているように、これから子育て期の家族を支える仕組み作りへ、真摯に取り組んでいく必要があるだろう。

第 3 節　コミュニティへの期待

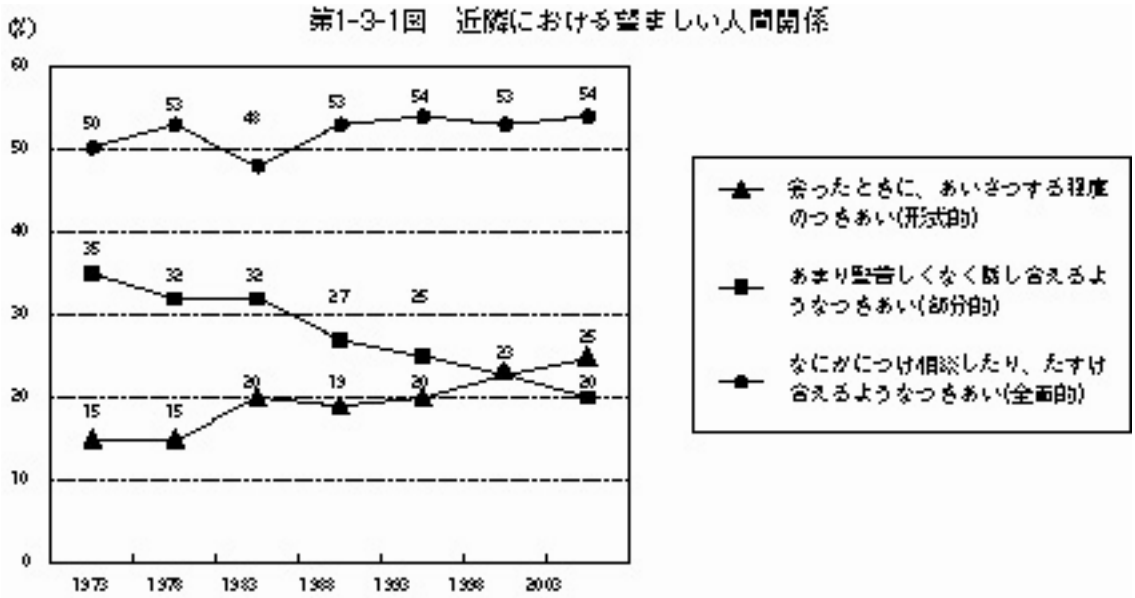
前節で整理したように、家族が「多様化」、「個別化」し、そして家族間の「不平等化」が進む今日、家族を取り巻くコミュニティへの期待が高まっている。

たとえば、天野正子は、子どもの社会化に不可欠な人間関係の広がりを促すために、「おとな自身が家族を地域にむけてひらくこと」（天野 1998:24）の重要さを以下のように論じた。「『私のもの、私の子ども』という親の意識をゆさぶり、子どもに仲間と群れあい地域のおとなとのナナメの関係を結ぶ機会を創りだすには、なによりもおとな自身が個人として群れあい、楽しみ、新しい自律的な『協同』の関係（地域の教育力）をむすぶ。知り合い同士、声をかけあって野外活動や趣味・旅行の共同企画をたてる、それぞれの家で家庭文庫や小さな音楽会をひらくなど、家族の流儀による様々な開き方が考えられる。そこから世代や家族をこえての知恵の貸し借り、生活技術の貸し借り、経験の貸し借りが生まれる」（天野 1998:24-25）。その上で、「そうした群れあう行為のなかで、おとなが『同じ（普通）である』ことへの呪縛から解放され、それを破壊し、互いに異なる『普通』の基準をもつようになるとき、子どもへのまなざしも変わっていくだろう」（天野 1998:25）と述べている。

つまり、子どもたちが豊かな人間関係を構築するために、まずは大人が、コミュニティと積極的に関わろうとする態度をもつことが必要であり、そうした実践によって大人自身が多様な価値観を認めることの重要性に気づき、ひいては、「教育の創生へと一歩を踏みだすことができる」（天野 1998:23）というのである。

しかし、コミュニティで親しい人間関係を形成することについて、決して楽観でき

る状況とはいえない。NHK 放送文化研究所が行なった「日本人の意識調査」では、近隣において、相手と限定的につき合おうとするのか、それとも密着した緊密な人間関係を維持しようとするのかを聞いている。その結果を第 1-3-1 図に示した。ここ 30 年間、「あまり堅苦しくなく話し合える」という「部分的」なつきあいを好む人が約半数を占めている状況に変わりはないものの、「あいさつ程度」の「形式的」なつきあいを支持する人の割合が年々上昇し、「相談したり、たすけ合える」ような「全面的」なつきあいを望む人の割合が減少し続けている様子が一目瞭然である。



出所：NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造(第六版)』(2004年、日本放送出版協会)p. 195

ただ、濃密な近隣関係を結んでいるか否かは、その人の属性に左右される部分が小さくないようだ。野沢慎司は、埼玉県朝霞市と山形市において、夫婦を対象とした「世帯外パーソナル・ネットワーク」に関する調査を実施している。そこで明らかとなった知見のひとつは、朝霞の夫と妻、山形の夫と妻のうち、朝霞の妻がもっとも多くの近隣関係を築いており、近隣からの援助に依存する度合いも朝霞の妻がもっとも高かった。

朝霞市は大都市郊外の新興住宅地であり、調査対象となった夫と妻の 7 割以上が県外出身者である。朝霞の妻たちは、「距離的にもっとも近い場所に形成・維持された比較的豊富な非親族との紐帯」（野沢 1995:186）のなかで生活しているのであり、「移動先の居住地においておそらく主婦としての必要に応じて近隣との関係を新たに形成している」（野沢 1995:186）と考えられる。一方、夫たちは職場で取り結ぶ関係を多くもっており、特に朝霞の夫は、山形の夫よりも、職場でのネットワークから多くの援助を得ていることも、この調査から明らかとなった（野沢 1995）。

ここから読み取れるのは、妻たちは主婦として、一方、夫たちは職業人として、近隣および職場でそれぞれ相互扶助関係を築かなければならないという必然性を抱えて

いたことである。朝霞の妻たちは、もともと「移動者」であるがゆえにコミュニティ内の親密な人間関係が相対的に貧弱で、それを補う目的から近隣とのつきあいを深めていったのだろう。

コミュニティにおける相互扶助関係については、倉沢進が示唆に富んだ議論を展開している。倉沢は、村落と都市の共同様式を比較し、前者における共同の原則は、非専門家ないし住民による相互扶助的な共通・共同問題の共同処理であるのに対して、後者のそれは、専門家・専門機関による共通・共同問題の専門的な共同処理であると述べた（倉沢 1977)。その上で、前者の「相互扶助システム」は後者の「専門処理システム」と比べて、住民間の情報交換やそれに伴う人間関係の強化といった重要な機能を含むと指摘している（倉沢 1998)。

この議論によると、コミュニティにおいて住民同士の紐帯を深めるためには、問題処理をめぐる共同活動をいかに展開していくかが重要なポイントでとなる。

以上の先行研究を踏まえた上で、子育て期の家族を支えるコミュニティ形成について考察してみよう。まず、子育てをめぐる問題や悩みをもつ人々がコミュニティとの関わりを深めようとする可能性があること。そして、彼ら／彼女らが問題意識を共有しあいながら交流を進めることにより、コミュニティの中に新しいネットワークを広げていく可能性があること。これらが仮説として導き出されるだろう。では、果たしてこの仮説に妥当性はあるのか。もしあるとすれば、どのような契機により、どのような過程を経て、こうした動きが展開していくのか。これらの課題を解き明かすことが必要となってくる。

もうひとつ課題としてあげられるのは、男性とコミュニティの関係についてである。ここで取り上げた先行研究においても示されたように、男性、とくに職業生活を営んでいる人々は、実質的に職場との関係が強い反面、コミュニティとの繋がりは希薄であるというのが大方の姿だろう。しかし、2007 年から 2010 年にかけて、団塊世代が一斉に定年退職を迎えるにあたり、定年後の新しい人生の舞台として、コミュニティへの関心が高まりつつある。彼ら／彼女らの豊富な知識や経験を生かしながら、コミュニティにおける活躍の場を模索しようという動きも始まっているようだ。今後、コミュニティが団塊世代の受け皿になると同時に、新たな人材を得たコミュニティがさらに活性化することへ、社会の期待が寄せられている。

では、積極的に育児と関わろうとする父親が少なくないという昨今の傾向は、子どもをもつ男性とコミュニティの関係に変化を促す新たな契機となりうるのだろうか。

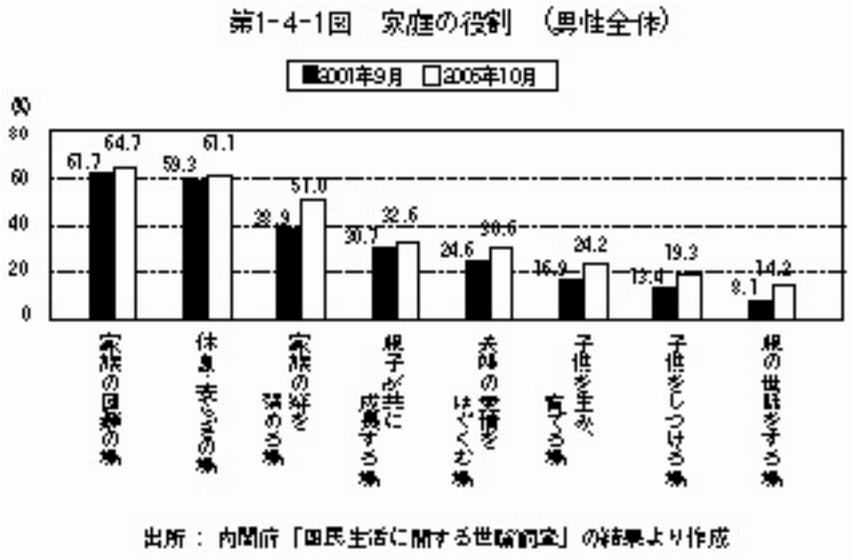
次節以降、こうした視点についてもう少し考察を加えてみたい。

第 4 節　現代の父親と家族の関係

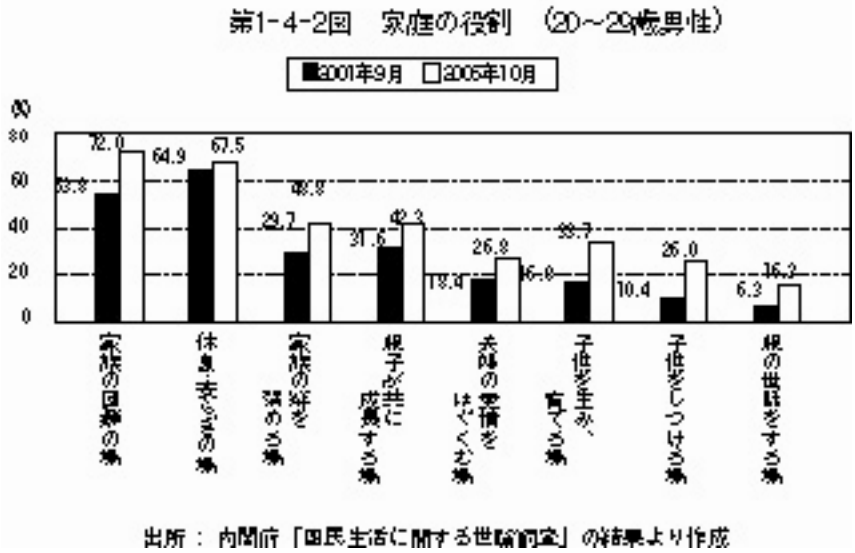
父親とコミュニティの関係を議論する前に、まず、今日における男性と家族の関係の実態について把握しておこう。

内閣府が毎年実施している「国民生活に関する世論調査」の中に、「あなたにとって家庭はどのような意味をもっているか」という質問がある。この問いに対する男性の

回答を見ると（複数回答）、2001 年 9 月時点と 2006 年 10 月時点では、いずれの項目も後者の割合が高くなっており（第 1-4-1 図）、家族に対する意識が高まっている様子が見て取れる。その傾向は、20 歳代から 40 歳代でとりわけ顕著になっており、中でも 20 歳代では「家族の団欒の場」、「家族の絆を強める場」、「子どもを生み、育てる場」がそれぞれ 20 ポイント近くも高くなっている（第 1-4-2～第 1-4-7 図）。男性の中でもとくに若い世代において、家族との関係作りを大切に考え、子育てを重視する人々が増えているといえるだろう。

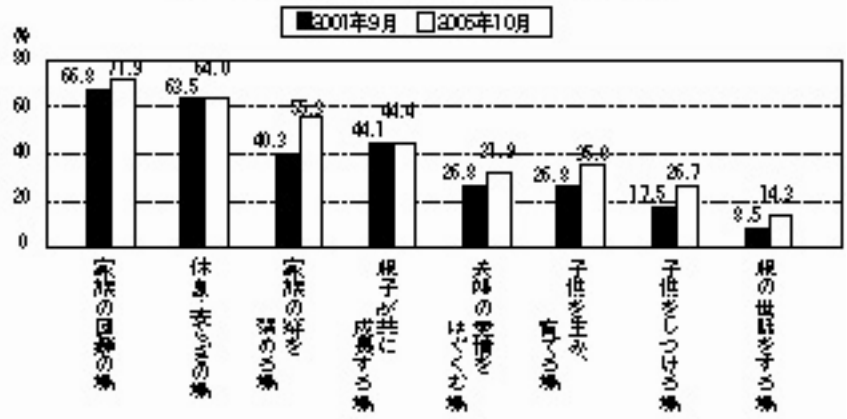


出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成



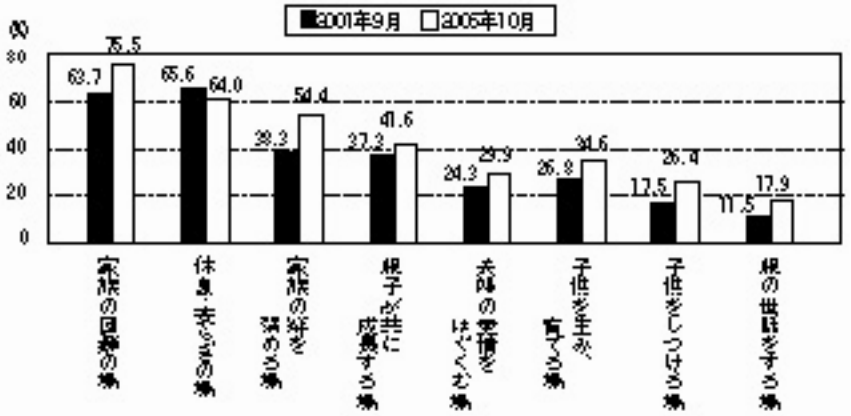
出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成

第1-4-3図　家庭の役割　（30～39歳男性）



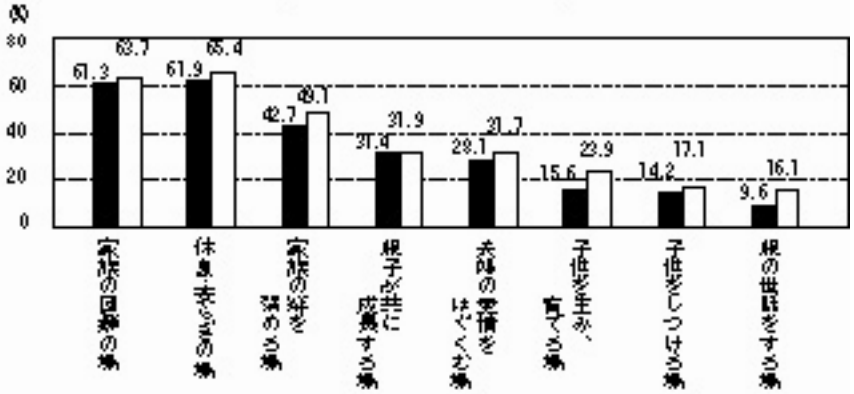
出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成

第1-4-4図　家庭の役割　（40～49歳男性）

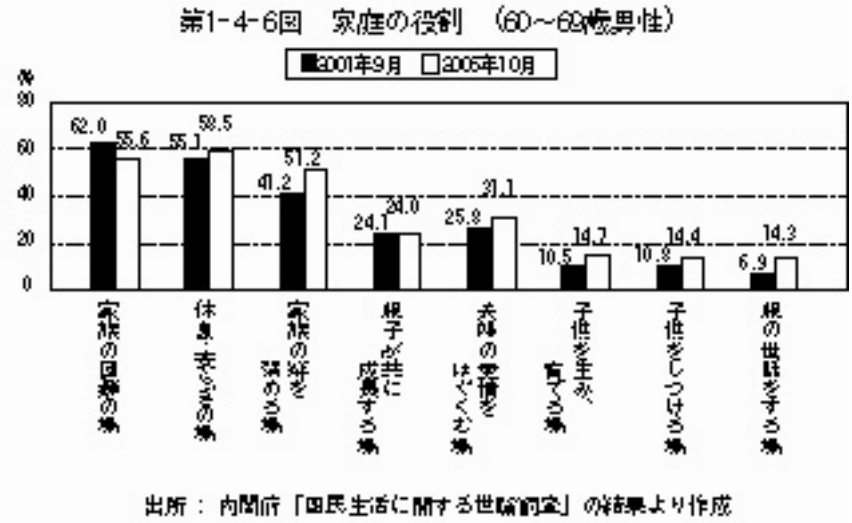


出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成

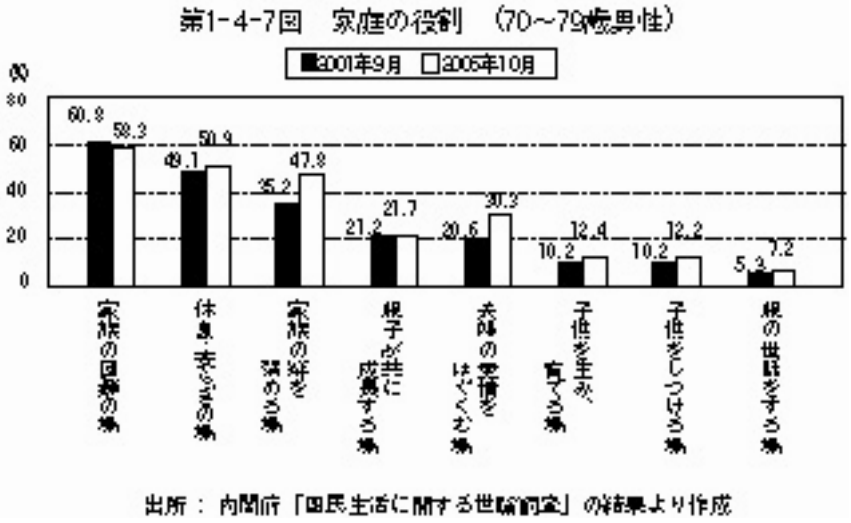
第1-4-5図　家庭の役割　（50～59歳男性）



出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成



出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成



出所：内閣府「国民生活に関する世論調査」の結果より作成

現役の子育て世代にあたる男性の家族や子育てに対する意識は、なぜ変容してきたのだろうか。男性を取り巻く経済状況から、その理由を探ってみよう。

木本喜美子は、現代日本の家族と〈企業社会〉の相互関連構造に関する議論の中で、労働者としての夫および父親の存在について言及している。木本によれば、物質的生活基盤の拡充を望む家族は、〈企業社会〉から「相対的高賃金」という恩恵を受け取る代わりに、長時間・不規則な「苦患労働」による夫＝父親としてのエネルギーの枯渇を強いられている。しかし、こうした状況においても、日本の家族は一定の均衡状況を維持しており、先進諸国の中でも問題現象の発生率はきわめて低い。その背景には、「〈企業社会〉が〈近代家族〉モデルを企業内福利厚生制度などを通して付与し、バックアップしたからであり、労働者そして家族の側も、物質優先主義という価値観を共有する限りで〈企業社会〉を下支えしてきた」（木本 1995:5）という、戦後日本における独特の経済的社会的状況がある。

このように、家族一丸となって〈企業社会〉の価値規範を受容する体制のもとでは、「父親＝夫の家庭不在の『働きすぎ』は家族に感謝されこそすれ、責め立てられる理由にはならないのである」（木本 1995:200)。木本らがある大企業労働者を対象に実施した調査でも、「家族に対して意外に楽観的なとらえ方が主流であり、とりわけ妻からの不満を敏感に受けとめているのはきわめて少数の人々に限られる」（木本 1995:186）という分析結果が得られた。

つまり、企業社会に身を置く男性たちの多くは、日常生活の中で家族と真摯に向かい合おうとする姿勢をそれほどもち合わせてこなかったのである。

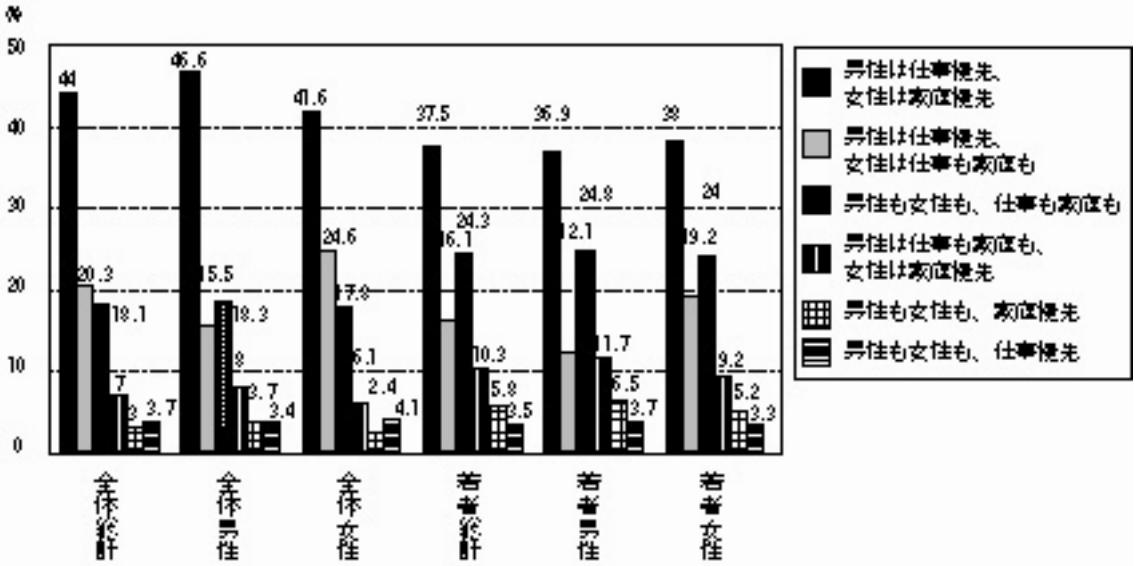
しかし、右肩上がりの成長が終焉をむかえ、バブル経済が崩壊した後、日本の雇用・労働環境は大きく変容した。企業の人員整理や業績不振にともなう失業者の増加、パートタイマーや契約社員のような非正規型の雇用形態の拡大、人事・賃金制度における成果主義の導入などが、その例としてあげられるだろう。このように、年功序列・終身雇用制度を特徴とする従来の日本型雇用慣行が行き詰まる中で、人々の勤労生活や家庭生活に対する意識にも変化が生じたといわれる。

労働政策研究・研修機構が行なった「第 4 回勤労生活に関する調査」（2004 年 8～9 月実施）では、「家庭生活と仕事について望ましいと思う生き方」を尋ねている。この結果をみると（第 1-4-8 図)、最も多い答えが「男性は仕事優先、女性は家庭優先」で、その割合は 44.0%、そして、「男性は仕事優先、女性は仕事も家庭も」が 20.3%とこれに次いでいる。

しかし、回答者を若者（20～34 歳）に限定した場合の結果は、少しこれと異なる。「男性は仕事優先、女性は家庭優先」が 37.5%で、やはり最多を占めている点には変わりがないものの、第 2 位が「男性も女性も、仕事も家庭も」の 24.8%（回答者全体では 18.1%）であることにその特徴が見られる。また、「男性も女性も、仕事も家庭も」を選んだ若者を男女別にみても、男性と女性の数値にほとんど差が生じていなかった。さらに、「男性は仕事も家庭も、女性は家庭優先」や「男性も女性も、家庭優先」を選んだ人の割合は、若者の男性が最も高かった（独立行政法人労働政策研究・研修機構 2005)。

近年における日本経済の低迷が、若年層の雇用環境を悪化させていることは、第 2 節ですでに述べた。そうだとすれば、労働市場の大きな変貌を目の当たりにした、あるいは、その悪影響をまともに受けた若い子育て世代の勤労意識に変化が生じ、その結果として、家族との充実した生活や子育てに重要な価値を見出す人が以前よりも増えたと考えることができる。

第1-4-8図　家庭生活と仕事について望ましい生き方　(2004年)

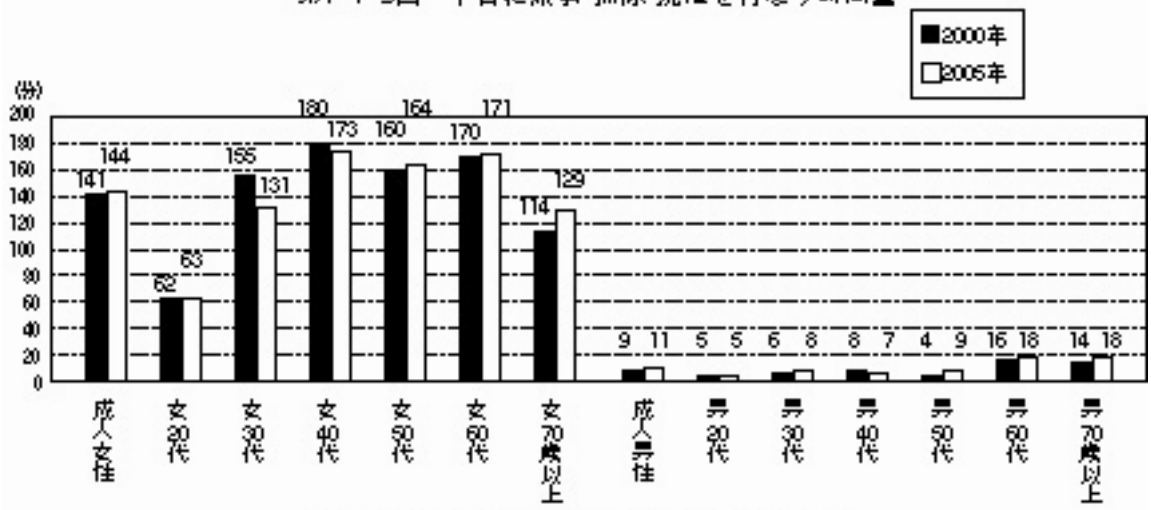


出所：独立行政法人労働政策研究・研修機構『ビジネス・レーバー・トレンド』2005年5月号p.4より作成

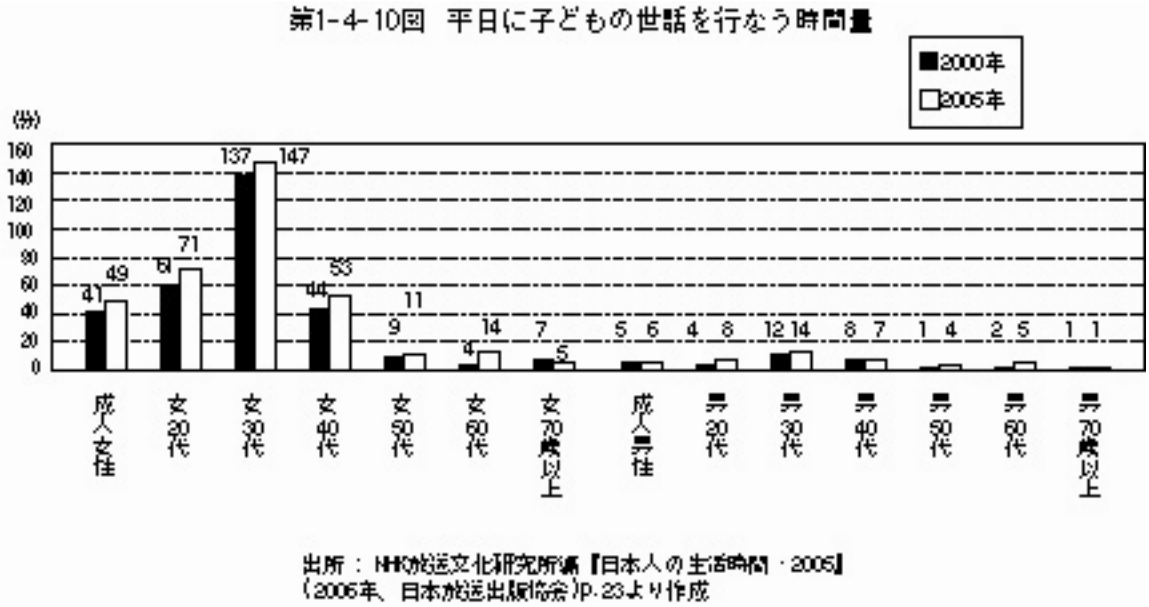
この他に、女性の就業率の高まりにともなって共働き家庭が増加したことや、「育児をしない男を、父とは呼ばない」（1999 年）という厚生省（当時）のスローガン提示に象徴されるように、男女共同参画の推進を目指す政府が様々な施策を行なったことなども、家族に対する男性の意識に影響を与えた要因といえるだろう。

そこで問題となるのが、こうした意識の変化が、実際の行動に結びついているのか否かということである。行動の変化を捉えるために、NHK 放送文化研究所「2005 年国民生活時間調査」の中から、平日に行なう家事の時間量の変化を参考にしてみよう。家事には様々な内容が含まれるが、ここでは「炊事・掃除・洗濯」と「子どもの世話」を取り上げる。

第1-4-9図　平日に炊事・掃除・洗濯を行なう時間量



出所：NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間・2005』(2006年、日本放送出版協会)p.23より作成



第 1-4-9 図および第 1-4-10 で示されたように、2000 年と 2005 年の家事の時間量を比較すると、男性が家事にあてる時間は全体的に若干伸びたことが見て取れる。ただ、子どもの世話について見ると、「女 20 代」「女 30 代」「女 40 代」では、5 年間でそれぞれ 10 分程度も増加しているのに対して、同世代の「男 20 代」「男 30 代」はそれほど大きな伸びは見られず、「男 40 代」では逆に減少していることがわかる（NHK 放送文化研究所 2006:23）。

その背景には、あいかわらず、長時間労働を強いられる男性が少なくないという現状があるだろう。NHK 放送文化研究所が行なった同じ調査の中に、仕事時間についての質問がある。その結果を見ると、男性有職者の平日 1 日あたりの平均仕事時間は、1995 年、2000 年、2005 年でそれぞれ 8 時間 11 分→8 時間 37 分→8 時間 30 分と変化した。2000 年から 2005 年にかけては時間数が減少しているものの、1 日に 10 時間を超えて働く男性有職者の割合は、25%（1995 年）→30%（2000 年）→32%（2005 年）と、増加の一途を辿っている（NHK 放送文化研究所 2006:107）。さらに、10 時間を超えて働く男性有職者を年代別に見ると、20 代で 37%、30 代で 46%、40 代で 40%、そして 50 代で 29%の割合を占めていた（NHK 放送文化研究所 2006:109）。

これらのデータから、「バブル崩壊後の不況のなか、企業が業績の立て直しを図ってリストラを進めたことにより、労働者 1 人にかかる仕事量が増大し」（NHK 放送文化研究所 2006:108）、とくに働き盛りである 30 代や 40 代の男性に大きな負担がのしかかっていると考えられる。こうした理由により、男性の家族に対する意識は高まったものの、実際に家事や子育てにあてる時間がそれほど大きく伸びなかったのだろう。

多賀太は、「労働時間の短縮や扶養責任の軽減がそれほど進まないまま、父親の育児参加を求める声が高まる中で、より多くの父親たちが、仕事と育児の間で葛藤を抱えるようになってきている」（多賀 2006:141）と指摘している。そして、こうした状況に対処するために、①「性別役割」を既成事実として認め、育児関与の不足感や負い目から逃れる、②可能な範囲で仕事量を減らし、その分育児に時間と労力を割り振る、③仕事を自宅へもち帰ったり、帰宅して家族と過ごした後、再び職場へ戻ったりして、

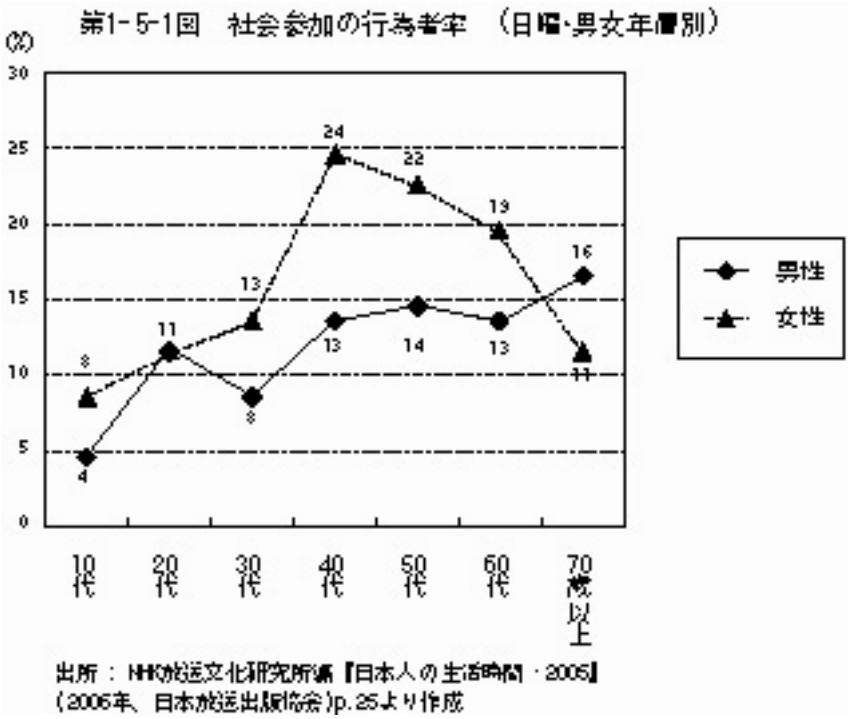
労働量を維持したまま育児責任も果たす、という 3 つの方向性を提示した（多賀 2006:142-143）[2]。

以上の議論をまとめると、現在、子育て期にある多くの男性たちは、家族や子育てにもっと関わりをもちたいと願いながら、その思いを十分に現実の行動へ反映させることが難しく、理想と現実が一致しない状況に置かれているといえよう。

そんな中で、家族との関係を考えるためのヒントを求めて、家族の外へ視点を向ける男性たちが徐々に増えつつある。次節では、父親とコミュニティの関係について論ずることにしたい。

第 5 節　現代の父親とコミュニティの関係

男性の近隣関係が概して希薄であることは、すでに第 3 節で触れた。これに加えて、男性は、PTA・町内会や地域の行事への参加、冠婚葬祭への出席、労働組合活動、生協活動、ボランティア活動など、地域性があり、しかも報酬の獲得を伴わない活動への関わりも女性と比べて活発でない傾向にある（第 1-5-1 図）。



しかし近年、男女共同参画センターなどが主催する男性向けの講座が各地で開催されるようになり、男性たちの関心を集めるようになった。現在の働き方や定年後の暮らしを考えたり、家族やコミュニティとの関係を見直したりする機会を提供しようという意図のもとで企画された講座が多く見受けられる。このほか、子どもと父親を対

[2] ただし、①は男女共同参画の考え方に反し、前進の度合いは小さい、②は「男から降りる」というイメージがつきまとう、そして③は父親の心身にかなりの負担がかかるといった問題も同時に述べられており（多賀 2006:142-143）、これら 3 つの方法が父親の葛藤を緩和させる特効薬とは、必ずしもならないことを示した。

象とした野外活動や料理教室など、父と子の絆をさらに深めようとするイベントも盛んに行なわれるようになった。

これらの講座や父と子のためのイベントが数多く企画・実施されているのは、男女共同参画の推進を目指すという社会全体の流れに沿ったものであろうが、実際に主催する側はどのような意図のもとでこうしたイベントを運営しているのだろうか。また、参加する側に目を向けると、どのような男性たちが、どのような動機からイベントに参加しているのか、そして、そこからどのような収穫を得たのか、あるいは得なかったのか。これらの点について、おおいに興味がそそられるところである。

男性たちの新たな試みは、本章の冒頭で述べたような子育て雑誌から情報を得たり、講座などへの参加を通して家族関係を問い直したりすることにとどまらない。今、同じ小学校や中学校に子どもを通わせる父親同士が連携し、子育ての楽しさや悩みを共有しながら、自分たち自身が生き生きと暮らせる方法を模索しようとする動きが活発化している。「おやじの会」や「父親の会」など、その名称は様々であるが、父親たちが組織するグループが全国各地で誕生している。2005 年 9 月には、「全国おやじサミット in 京都」が開催され、日本「おやじの会」連絡会が設立された。同会の登録団体は 826（2007 年 3 月 12 日現在）にのぼる。同会の推計によると、現在、父親らのグループが全国で 3,000 から 4,000 ほど結成されているという。その数値は今後も伸び続ける勢いだ。

従来、子育てをめぐって、同じ立場にある者同士が手を組み、サークル活動を行なうのは、母親に限定されていたといっても過言ではなかった。ところが今日、多くの男性が、「父親」という立場で活動に参加しようとすること、しかも、職場や家庭以外の空間であるコミュニティで、新たな人間関係の構築を図ろうとしているのである。前節までの議論を踏まえるならば、こうした動向はきわめて示唆に富んだ、注目に値する社会現象のひとつではないだろうか。

しかし、父親たちが展開する活動について焦点を当てた研究は、現在のところまだ十分に行なわれていない。数少ない研究者のひとりである平田裕美は、「父親の会」活動の意義と機能に関する考察を行なっている。平田によると、「会」に参加する父親の動機は、PTA に対する不満や違和感が大きく、「会」の形成にあたっては、「父親らしい活動がしたいというニーズを満たしてくれる父親主導型の運営方針」（平田 2005:96）が重要であるという。また、「会」の活動を通じて、父親が「地域の子どもにも目を向ける」（平田 2005:97）ようになることから、「会」の活動が「地域の教育力の向上に貢献する組織として期待できる」（平田 2005:97）と評価した。

ただ、ここでは、その冒頭で、父親たちが子育てに関心を向けるようになった背景として、1990 年代以降の経済的社会的変化に触れ、「子どもの養育者という役割を担いながら、いかにして就労を行うのかという問題が父親に課せられてきたことを意味している」（平田 2005:86）と述べていながら、事例検証の過程ではそうした課題に一切言及していない。父親がもつ「父親」以外の地位役割にも目を向けることにより、初めて活動への参加動機をより重層的に捉えることが可能となるだろう。

父親たちのグループ活動がコミュニティ形成の可能性を秘めていることは、吉岡亜

希子によっても指摘されている。吉岡は、札幌市の「おやじの会」を取り上げ、父親たちが相互交流や子どもとの時間の共有の楽しさを感じながら、もっと子育てに関わろうとする意識を醸成させていく過程に注目した。さらに、参加した父親がコミュニティで展開する様々な活動へと視野を広げていく点に、大きな現代的意義を見出している（吉岡 2006）。

吉岡の議論では、父親を巻き込んだコミュニティ形成の重要性が示唆されている。では、具体的に父親たちがコミュニティとどのように関わりをもつようになるのだろうか。そして、そうした父親の関与がコミュニティに対してどのような変化をもたらすのだろうか。これらの課題が浮かび上がってくる。

第 6 節　本書の目的と構成

第 5 節までに述べてきたことを簡単に整理すると、今日、家族の多様化や個別化、および家族間の不平等化が進み、家族をめぐる新たな課題が生じるなかで、コミュニティにおいて豊かな人間関係を築きながら、そうした課題の解決を図ることが期待されている。他方で、子育て期にある多くの父親が、子育てにもっと積極的に関わりたいと考えてはいるものの、現実にはそれに費やす時間的余裕がないなどの理由から、ジレンマに陥りやすくなっている。こうした状況のなか、男性講座や親子教室、および父親グループの活動に参加して、そこで何かを学び取ろうとする父親が増えつつある。

以上のような現状認識のもとで、本研究では、家族やコミュニティの人々とより親密な関係を築くため、新たな行動を開始した男性たちに焦点を当てる。こうした動向が生じてきた背景を明らかにし、その意義について検討を加えたい。ここでの最終的な目的は、これらの新たなうねりが、今日の家族が抱える様々な課題を解決するための糸口となりうるのか。もしなるのであれば、どのようなメカニズムによってそれが実現するのかという課題を考察することにある。

分析データの収集にあたっては、質的な調査方法を選択した。まず、実際に彼らの活動がどのように行なわれているのかという現状把握のために、いくつかの NPO や父親の会などで参与観察を実施した。それから、イベントの主催者や活動グループの代表者らに対するインタビューを行ない、活動が始まるまでの経緯や目的など、活動全体の概要について聞き取った。さらに、活動に参加する人たちへ個別に協力を依頼し、参加動機や活動の前後における意識の変容などについて、丹念に語ってもらった。

以下、第 2 章では行政や NPO が企画・実施する男性講座や父子教室を取り上げる。これらのイベント主催者に対して行なったインタビュー調査の結果をもとに、主催者が意図しているものや、参加者がイベントに期待しているものについて言及する。次の第 3 章では、兵庫県内で活動を展開している父親のグループ（以下、「父親の会」と呼ぶ）に焦点を当てる。その前半部分で、父親の会が各地で結成されてきた背景を探り、父親の会として行なう活動がどのような意味をもっているのかという点を明らかにする。また後半部分では、父親の会に参加する人々の意識に迫る。会のメンバーに

対して行なった生活構造に関するインタビュー・データをもとに、会の活動がメンバーの意識と生活にどのような影響を与えたのかを考察する。さらに、その章の終わりで、父親の会の活動が活性化する条件とは何かについて論ずる。最後の第 4 章では、コミュニティにおける父親たちのネットワーク活動が、子育て家族の課題を解決する可能性について議論し、本研究の締めくくりとしたい。

第 2 章　父親の子育て参加を支える取り組み

第 1 節　はじめに

第 1 章で見てきたように、父親の子育て参加は、少子化や幼児虐待など子どもをめぐる問題を考える上での社会的な要請だけではなく、父親自身の側からの志向でもある。では、父親が子どもと関わろうとするとき、それは、父親がその意志をもつことのみによって、実行できるものなのであろうか。言い換えれば、父親が子どもと関わろうとするとき、そこには何が必要なのであろうか。

第 2 章では、行政や NPO、地域のボランティア・グループが展開する、父親の子育て参加、家族参加を支える取り組みに焦点をあて、主催者へのインタビューを通して、子育て期の父親の現状や子どもとの関係、父親と子どもが関わっていく上で必要なことは何かについて考察する。また、男性が行なうボランティア活動についても調査し、男性が地域や地域の子どもと関わりをもつことの可能性やそこでの課題を明らかにしたい。

第 2 節　調査の概要

1. 調査方法

調査方法は、調査員が調査対象者に個別に面接し、あらかじめ決めておいた質問項目（下記参照）に沿って、調査対象者に聞き取りを行なうという半構造化された個別インタビュー形式をとった。インタビュー調査に要した時間は、平均 1 時間程度である。ただし、父親フォーラム主催者への調査についてのみ、質問項目に回答を記入してもらう形式で実施した。

質問項目

◆概要
　①主催者
　②取り組み内容
　③参加者数
　④実施後の参加者の感想
　⑤実施後の主催者の感想
◆取り組みを企画した経緯
◆準備段階等での女性を対象にした企画との相違点
◆取り組みを実施してみての成果と課題
◆以前に男性・父親を対象に実施した講座があればその内容と成果について
◆男性の家族参加、育児参加の状況について感じていること
◆男性が家族、育児に関わっていく上で、必要であると感じていること

2. 調査対象の選出

インターネットや広報誌を利用し、行政や NPO 団体が取り組んでいる父親と子どもや父親のみを対象としたイベントや企画を抽出し、内容や地域を考慮し対象者を選出した上で、主催者に対するインタビューを実施した。

3. 調査時期

2006 年 11 月～12 月

4. 調査対象の属性

調査対象の設定にあたっては、調査の目的に応じて、男性、父親を対象に、子どもや家族との関わりを支援する取り組みについて、主催者の属性が違えば、その内容にも差異が生じるのかどうかを明らかにするために、行政の取り組みから 2 例、民間の取り組みから 2 例を選択した。また、事例 5 については、男性のボランティア活動への関わり方と子どもを対象としたボランティア活動の実態の両方の事例として、ボランティア・グループのリーダーでありかつ個人的にボランティア活動を行なっている方を対象として選択した。

第 2-2-1 表　調査対象の概要

	主催者	対象団体・活動	インタビュー回答者	対象とした取り組み
事例 1	行政	尼崎市女性センター「トレピエ」	男性セミナー企画担当者	「男性セミナー」
事例 2	行政	西播磨県民局 龍野健康福祉事務所	父親子育てフォーラム担当者	父親子育てフォーラム
事例 3	民間 NPO	NPO 父親サポート関西	父親サポート関西代表	「楽しい科学実験＆おもちゃづくり」など
事例 4	ボランティア・グループ	コープ食育くらぶ「食のサポーター」	コープ食育くらぶメンバー	「お父さんと一緒のクッキング」
事例 5	ボランティア・グループ 個人ボランティア活動	ボランティア・サークル「ミスターエイト」 個人ボランティア活動	サークル代表者	日常の活動内容全般について

第 3 節　インタビュー事例

1. 行政の取り組み

（1）事例 1. 尼崎市女性センター「トレピエ」主催の「男性セミナー」

① 概要

テーマ　：第 1 回　アクセサリー作り
　　第 2 回　コーチング
参加人数：第 1 回　11 人
　　第 2 回　11 人

② テーマ設定の理由

男性やお父さんたちを対象とした企画としては、結構どこでも料理教室が開催されていて、トレピエでも、お父さんと子どもを対象にした料理教室を開催したこともありますが、料理だけが男性の家事参加じゃないなっていうことをいつも思っていました。実際に、アメリカでは男性の編み物がはやっているし、日本でもはやりつつあるんです。その中で、物を作るということについて、女性だけじゃなくて、男性にも楽しさが分かればいいと思って、アクセサリー作りを企画の一つに選びました。ただ、それだけでは、趣味だけで終わってしまうので、男性セミナーは啓発事業ですから、つくったアクセサリーをコミュニケーションをとるために役立ててもらおうと、コーチングを第 2 回目の企画にしました。

③ 女性を対象とした取り組みとの違い

企業の中での生き方を言ってあげないと、男性は集まらないと思います。たとえば、大学の先生が講師では集まらないけれど、現役の大手企業の人材育成の課長が講師だと集まるというようなことがあると思います。ただ、今回の男性セミナーは、募集には苦労しませんでした。参加の理由は、妻から勧められて、という方が多いですね。

④ コーチングについて

コーチングは、企業向けのものではなく、地域に目を向けて、妻と子どものコミュニケーションを主なテーマにして、仕事にも生かせて、家庭にも生かせるような話を、事例をあげてしてくださいとお願いしていました。比較的たくさん家庭に役立つような話をしてもらえたと思っています。

⑤ 男性を対象にする理由

女性センターに相談にこられる方のほとんどが、男性、つまり夫との関係が理由です。DV というのはその最たるものだと思いますが、それを、女性のほうは、地域に根付いているので、こういう施設で、無料でこんな講座をしているというのをよくご存知なのですが、男性は、会社に行ってしまうと、まったく地域の情報を知りませんよね。市報

なんか読まないですし。でも、一番しんどいのは男性じゃないですか。世の中で。自殺する人はほとんど男性なんだし。やっぱり男女共同参画っていう視点から言うと、女性ばかりではなく、男性も地域に密着した、自分を見つめなおす時間が必要だろうという世の中の流れもあります。

⑥ 参加者の様子

参加者の方は、とても喜んでいました。やったことのないことをさせてもらったという感じでしょうか。これほど、参加者が寝る方もなく、楽しそうにされている講座はなかったですね。2 時間の講義型の講座を開催すると、皆さんお疲れの時間帯ですので、たまに、眠ってしまわれる方もいらっしゃるんですが、今回は、皆さん全然寝ていなかったのでよかったなと思います。アクセサリー作りももう本当に楽しそうで、真剣でした。夫が妻のことを考えながらつくっていて、本当に一生懸命つくっていて、楽しそうでした。「すごく楽しかった」とか、「不器用だからできないと思っていたのに、できた」とかそういう感想が多かったです。

⑦ 男性の子育て参加について

今、男性は、すごく忙しくて、長時間働いていて、たぶん子どもと関わりたいと思ったとしても、疲れ果てているのだと思います。今回の講座には、1 歳半から就学前までの子どもを対象に保育をつけたんです。11 名の参加者のうち、4 名が保育を利用しました。30 代の参加者の全員が利用したことになります。夫に子どもをつれて出かけてほしい、つまり、妻が、解放されたいということで、夫に参加をすすめたのではないかと思っています。夫と子どもに行くところさえあれば、妻はその間一人でいられるわけですから。一番いいのは、日常的に子育てや家事を夫がすることだと思いますけど、でも、今は、男性が、それすらできないぐらい働かされていますよね。だから、子どもと父親がここに参加している間に、お母さんが楽になるのであればいいなと思っています。お父さんにとっては、いい迷惑だったと思いますよ。休みの日に無理やり勧められて。

⑧ 夫婦間のコミュニケーションについて

女性で、自己表現などの講座に来る人はたいてい決まっていて、同じ方がこられることが多いんです。そのままカウンセリングにつながったりする場合もあります。その方の夫婦関係はどうなのかなと思うのですが、その方のご主人が男性を対象としたセミナーに参加されることもあるので、実際のところはよくわからないのです。今の男性は、どの家庭もわりと妻に協力的な方が多くなっていると思うのですが、ただ、主観ですが、その言葉の使い方や、つなげ方がうまくいっていないのかなという気はします。

女性センターでの活動ではないのですが、個人的に、助成金をとって、夫婦を対象にした講座をやっています。仲のいい夫婦をつくりたいと思って、カラー・コーディネートの講座とかをしているのですが、その講座に参加するのだから、仲のいい夫婦なのだろうと思っているのですが、夫婦にアンケートをとってみると、微妙にずれがあるんです。たとえば、夫は妻のことについて、「優しい」「癒される」など、妻がいることで得

られる内面的なことも書いてくれているのですが、妻は、夫について「家事を手伝ってくれる」とか「子育てを手伝ってくれる」とか内面的なことではなくて、結果として見えることに感謝をしているんです。夫は妻の内面を見て感謝をしているのだけれど、妻は、夫の内面までは見ていないようなアンケート結果が多いんです。

⑨ 今後の課題

男性セミナーに参加されるような男性は、そんなに妻からいやな夫だと思われていないと思います。むしろ、「男性セミナーにいってきたら？」というようなことを、夫にいえない妻のほうが多いと思います。本当は、もっと企業が、こういった取り組みをしてくれればいいと思っているんですが、企業というのは、みんながやっていたら自分もやらないといけないというように思われるところがあるので、地道なことを続けていって、こういった取り組みがあたりまえになってくればいいかなと思っています。企業も、ワーク・ライフ・バランスに関する研修やセミナーにすごく力を入れていらっしゃるので、変わってきてはいると思いますけど、それはまず大企業からのことなので、もっと広がっていくためには、こういう施設でサポートしていく必要があると思います。

（2）事例 2. 兵庫県西播磨県民局龍野健康福祉事務所主催「父親子育てフォーラム」

① 概要

内　容　：おもちゃ作り
　　親子遊び
参加者数：子ども 35 人　父親 20 人　母親 16 人　その他 15 人

② 企画の経緯

子どもと関わる機会が少ない父親に、子育てについて学ぶ機会を設け、育児参加を促進支援するため、父親子育てフォーラムを開催した。

③ 母親を対象にした取り組みとの違い

母親の場合は、専業主婦の方が大半なので（中には仕事をもっている方もおられるが）考えなくていいのだが、父親に参加してもらうとなると、休日設定になり、10 月というと、各地域で祭りなどが重なっているので、調整がむずかしかった。動員に関しては、まちの子育てひろば開設者や各市町・各市町社会福祉協議会等にお願いして、参加を呼びかけていただいた。祭りや日曜日ということで、なかなか参加に積極的に意欲をみせていただけなかった。あとは、たつの市近辺のまちの子育てひろばや行政に参加の声かけを、お願いにまわった。

④ イベントの成果と課題

たくさんのお父さん方が参加してくれ、子どもと一緒になっておもちゃ作りや体操などをしてくれたので、親子にとって有意義な時間がつくれたと思う。参加当日は、本当に来てくれるのか心配だったが、思った以上にお父さんがたくさん来てくれたので良か

った。参加された方からは、子どもを遊ばせるのに良い知識が得られた、子どものいつもと違う一面が見られたなどの感想を聞いた。

課題としては、西播磨地域内では、まだまだたくさんの親子がひろばに参加しているが、今回はほんの一部しか参加されていない。これからもっともっとたくさんの人に、参加してもらえるような企画や場所、日程等を調整して、内容の濃いイベントを考えていかなければと思う。アンケートにも書かれていたが、自分の子どもにどう接したらよいか分からない親や、叱り方が分からない親がとても多いのに驚いた。今後は内容を企画していく中で、考慮していかなければいけないと感じた。また、父親が育児参加できるようなＰＲが必要である。

⑤ 父親の家族参加・育児参加の最近の状況についての印象

父親の育児参加はまだまだで、子どもとの接する時間が、30 分～1 時間程度しかないことが分かった。もっと父親の育児参加を促進できるようＰＲや母親の子育て状況等を知らせることが必要である。

⑥ 父親が家族・育児に関わっていく上で、必要だと思うこと

たとえば、家族一人ひとりみんなで分担し子どもをみるなど、家族全員で子どもの育児支援をしていくことが重要だと感じている。

2. NPO など民間での活動

（1）事例 3. NPO 父親サポート関西の活動

① 概要

取り組み内容：「科学実験とおもちゃ作り」の講座や大人向けの講演会など
年間活動回数：約 100 回開催
延べ参加人数：約 3000 人

② 設立の経緯

企業の商品開発に関わっている人たちで結成した異業種交流会のメンバーが、父親と子どもは意外とコミュニケーションが取れていないのではないかという問題意識から立ち上げたのが、「神戸親父の会」で、名称変更をして現在は、「父親サポート関西」です。

③ 取り組みの内容

基本は本格的な科学を子どもたちに楽しく教えるという「仮説実験授業」がテーマです。すばらしい科学の教え方で、子どもたちがすごく科学が好きになっていきます。基本的な授業は、科学の実験を 1 時間やって、その後 30 分くらいでおもちゃ作りをします。科学の授業というのは、何を主旨としているかというと、主体的な子どもたちを育もうというのが基本にあるんですね。だから授業のやり方が、こちらから問題を出しますけれども、あなたはどう思うという選択肢を全部あげて、一人ひとりに選んでもらって、

何でそう思う？っていう理由を考えてもらって、最終的に実験で決着をつけようということです。自分からつかみとるように授業をしむけていくんです。

④ 父親の参加の現状

今年、ある市の男女共同参画センターで、「お父さんとあそぼう」という親子教室を、お父さんと子どもだけを対象として企画したところ、20 組 40 人の定員のところに、106 組から応募があったんです。お母さんが、お父さんに内緒ではがきを出して、通ったら「お父さん行ってきて」というパターンが多いみたいです。全員が喜んできているかどうかはわかりませんが、きてもらって、科学おもちゃを作ってもらうと、お父さんというのは科学とか好きなので、大変喜んでもらっています。「僕は申し込んでいるのを知らなかったけど、来てみたら楽しかった」という感じです。お父さんが積極的に自分から参加しようとしているというよりは、お母さんが主導権を握っていて、お父さんはそれにしたがっているという傾向がちょっと見えるような気がしますね。優しそうなお父さんが結構増えていますね。本当はもっとお父さんに主導権をとってほしいところですが。

⑤ 講座をきっかけにした父親の変化

大阪で実施した科学教室で、お父さんたちに材料を渡して、これで子どもたちに教えて、一緒に遊んでくださいという試みを行ったんです。これがすごく喜ばれて、子どもたちが今日お父さんどんなおもちゃを教えてくれるんだろうって、すごく心待ちにして待っていてくれる。それまで、自分の子どもに待たれるなんてなかったということを言っているお父さんがいました。

講座の最後のときには、家族にもきてもらって、科学教室を開いたんですが、そこのお母さんに、「こういうところにこられたから、お父さん、日曜日なんかにはよく子どもたちと遊んでくれるでしょう？」と聞いたら、「この教室が水曜日にあるので、水曜日に休みを取るために日曜日も仕事に行っています」といわれました。水曜日に教室に来るためにわざわざ日曜日に会社行ってまでお父さんが子の教室に集まっているんです。親子だから、きっかけなどなくてもコミュニケーションは勝手に取れるものだと思っていましたが、そのきっかけをもっていないお父さんがいて、科学教室で提供しているような科学おもちゃなど媒介にすると随分コミュニケーションが深まっていくことに気がつきました。

⑥ 父親と子どもの関わり

お父さんが積極的に子どもと関わっている家庭というのは穏やかですね。お母さんがすごく、いいお顔をされています。楽しく共有できるもので、子どもと関わるというスタンスを作っておけば、子どもと関わる上で、その場その場での判断に多少失敗したとしても、そんなことはどうでもいいと思います。スタンスがきちっとしていれば、全然問題なく関係性ができると思います。逆に、スタンスができていないのに、叱り方や、その場その場の関わり方を考えても、難しいと思います。やっぱり、お母さんは子ども

たちが小さいころ大事に守ってあげる役割をするのが得意だと思うんですけど、お父さんは、物心がちょっとついてから、社会とどう向き合うかとか、他者とどう向き合っていくかとか、仕事とどう向き合うとか、そういうところでもっともっとお父さんの役割があると思うんです。別に、男女どちらでもかまわないんですけど。お母さんがやってもいいんですが、そういう役割をもっと、お父さんに担ってほしい気がしますね。

私はまさに、子どもをダシにして自分が楽しんでいるからある意味で続けられるというということがあって、結果的に子どもたちも楽しんでくれているんだろうなということがあります。だから、子どもということがすごくおもしろい。その子が将来どういう世界へ入って、どういうふうになっていくんだろうということが楽しみです。少なくとも私たちが歩んできたような世界ではない、新しいもっと豊かな世界を子どもたちに築いていってほしいなと。そういう応援とかサポートとか先導役を果たせたら父親としてすごく幸せなのではないかと思います。

⑦ 今後の活動について

いままで、関係性がないお父さんが、いきなり子どもと遊ぼうといっても難しいと思います。きっかけ作りが重要だと思うのですが、仕事一筋のお父さんが、子どもと一緒に科学教室に来ることはなかなか難しいと思います。そこで、まだ具体化していないですけども、なるべく企業の中に入っていくようなことを考えたいなと思っています。平常の仕事が終わってから職場を借りて、科学実験やおもちゃ作りをしてそれをもち帰って、子どもに伝えるような場面をつくっていきたいと考えています。お父さんがすごいと感じられるような体験をすることで、子どもは、お父さんの存在が大きいと感じます。それは、お父さんが新しい世界を教えてくれることでもあると思います。

⑧ 子どもをめぐり、いま、求められていること

私たちは、団塊の世代ですけど、何でも質よりも量が優先されてきた時代だと思うんです。少子化対策といっても量の問題ばかりが重視されているけれども、むしろ、子どもたちがこれからどう豊かに生きていくかというまさに、質が問われている問題だと思います。子どもたちが夢がもてるような世界をもっともっと大人たちが提案していかなければいけない。お父さんがどうしても子どもと向き合いにくいというのは、企業の中で働く上で、自分のアイデンティティをつくりにくいということと関係があると思います。どうしても上司のいうことを聞かなければならないとか。父親が自信をもって、こういう生き方をしているということを、いいとか悪いとかを抜きにして、自分が語れるものを子どもに対してもっているかというと、なかなかそれが育ちにくいということがあると思います。

子育ての問題は親の生き方の問題でもあるし、大人がどう仕事と向き合っているのかその中身の質を問うていくことが必要で、量だけこなしてお金をもらってという時代ではなくなってきている。そういった意味での仕事との向き合い方や中身の質を提案できる大人が少ないと思います。ビジネスの中で、これからは物売りじゃないですよと、多くの人たちが生活ニーズをどう高めて、生活が豊かになって、その必要性として「もの」

を買っていくという、「もの」は部品にしかすぎませんよ、部品を扱っちゃだめですよ、と考えているんです。お客さんの生活の質をどう高めるかという提案を常にしていって、家を買ったけれども、その家の中でどう楽しんでいるんですか？とか、車を買って、車をどう自分の生活の中で豊かに使いこなしているかということが重要だと思います。

⑨ 男性が地域社会に関わる上で大切なこと

何でも自分が一からつくるというのは難しいわけですから、いろんなボランティア活動なんか、どんなことでもいいから体験してみて、あ、これはすごい感動したとか、これは面白いと感じたことをとりあえず、ほかの人に伝える役割をしていってほしいと思うんです。こんなことがあるから、子ども会でやらないか？とか、自分もこれぐらいだったら教えられるよ、とか、こんなことを教えてくれる人がいるから呼んでこようかとか、そういうつなぎの役割から入ることがいいと思います。こうしないといけないということではなくて、自分が楽しいとか、おもしろいなとか、感動したものを周りに伝えるという役割からはいることは簡単だし、それをすることでまた、感動につながると思うんです。そういう役割は、探せばいくらでもあると思います。

(2) 事例 4. コープ食育くらぶ「食のサポーター」主催「お父さんと一緒のクッキング」

① 概要

取り組み内容　：父親と子どもを対象にした料理教室
参加組数　　：14 組（父親 11 組、母親 3 組）

② グループについて

生協（生活協同組合コープこうべ）で活動している「食のサポーター」というグループで、メンバーは 14 名です。ほとんどがコープ委員会という生協の活動の経験者です。2001 年から「食のサポーター」という生協のサークル活動を行なっていましたが、2004 年から、生協が食育を推進するための「食育くらぶ」という活動を支援することになって、コープ食育くらぶ「食のサポーター」として活動することになりました。現在 3 年目です。

③ 取り組みのきっかけ

はじめは食の支援サークルという形で立ち上がって、お料理教室という形で主婦向けのことをやっていたんですけど、食育という部分に目を向けて、子どもの食の大切さなんかも取り組んだらいいねということではじめました。お母さんたちは自主的に出る場面が多いですけど、お父さんと一緒のクッキングって、結構楽しいんじゃないかということで。男の方も料理される方が最近増えていますよね。

別のグループで、男性料理教室もやっているんですが、こちらも毎月でもやってほしいというリタイアされた男性の方もいらっしゃって、結構集まるんですよ。それで、男性もお料理に興味があるのではないかということで、お父さんと子どもを対象にした、料理教室をすることにしたんです。ネーミングもいろいろ考えて、パパと一緒にという

よりは、お父さんのほうがいいよねということで、「お父さんとクッキング」というタイトルにして、去年は、神戸新聞で取り上げてもらいました。結構好評だったので、これを食育の取り組みとして、活動の中身として展開しようということになりました。

④ 父親と子どもを対象にした理由

やっぱり、お父さんと子どもの関わりをつくってあげたいなという部分ですね。それから、お父さんもこれからの時代、自分たちでも料理ができないといけない時代になってきつつあるということも感じて、お父さんを対象にしました。

⑤ 父親の料理教室への参加のきっかけ

「どこでお知りになられて申し込まれたんですか」ってお尋ねしたら、「妻からです」という感じの方が結構多かったんです。それと、この料理教室は、去年から始まっているんですが、1 回こられてまた良かったというので参加されている方もいらっしゃいます。

⑥ 料理教室の様子

参加されるお子さんも、男の子が多いんですよ。男の子も結構上手で料理をやりたがります。お父さん自身も、子どもにさせたいという親としての気持ちのほうが前に出ているかなという気がします。子どもがやりたいというのをお父さんがサポートする形で、お父さんが自主的に先にやるのではなくて、メインは子どもですという人がほとんどです。男性の料理教室だと本当にいろいろと個性が出るんです。たとえば、お料理せずに後片付けとか食器出しとか一生懸命されて、肝心のお料理をされないで、うちでもそうしていますという人とか、自主的にぱっぱっとされる方とか、本当にいろいろと個性が出ます。いつも自分で料理をしていて、くぎ煮まで教えましょうかという方もいらっしゃったり、ほかの方と分担しないで、一人でメニューを 3 品ぐらい全部作りたいという人もいます。でも、親子を対象にすると、みなさん子どもさんをメインにして、サポートをされます。

お父さんと子どもの料理教室のほうが、お母さんと一緒のときよりも子どもが楽しそうな感じがします。お母さんのお料理はいつも見ているからなのかもしれないし、お父さんと一緒というのが楽しいと思うのかもしれません。料理教室に参加するお母さんの中には、とてもお子さんに厳しくて、「包丁の使い方がおかしい！」とか子どもに指摘するお母さんもいて、なんか怖がってしまって、子どもが萎縮してしまったこともありました。その点、お父さんというのはわりと子どものやるのを見ているというか、そういう何か包み込める部分があるのかなという思いはありますよね。だから子どももやりやすいんじゃないかと思います。やっぱり母親というのは自分がやっていることを子どもが鏡としてみていて、その場面でされたら、なんか自分のしつけがなってないという思いが出るのかなと感じています。

⑦ 食育を取り上げる理由

いまは、民間でも行政でも食育というのにすごく力を入れていて、私たちの取り組みもタイムリーなことだと思います。こういう状況の中で、食育について両親で同じことが言えたらいいなというおもいがあります。お母さんだけでなくお父さんにも知ってもらいたい。お母さん自身も食育についてどの程度理解されているのかわからないし、食育は、必要なことではないでしょうか。

⑧ 父親と子ども･家族との関わりについて

最近は、家庭に関わっている男性って多いのではないかと感じます。この間、お父さんと子どもが親子でお買い物をしているときの会話をたまたま聞いていて、「お父さん、今日、何にするの？」と子どもが言ったら、「カレーだよ」とお父さんが答えて、「うれしい！」とか言っていて、お母さんがどうもお出かけみたいで、お父さんと子どもが相談しながら買い物をしている姿を見たんですよ。今の買い物のシステムもお父さんが入りやすいようなシステムになっていると思います。たとえば、市場とか商店街だったら、一軒ずつ入って、買い物をするのにもお店の人と話をしないといけないけれど、いまだったら、ほしいものをかごに入れて、レジに並ぶだけで買い物ができますから、男性にも買い物がしやすいシステムになっているように思います。

それに、最近のお父さんは、やさしいのではないかと思いますね。お休みの日でも、お父さんが赤ちゃんを抱っこして。ファミリーでお買い物されている方も多いですよね。外では仕事をバリバリして、帰ってきてはまた家庭のこともやって、男性は結構忙しいなと思いますね。お母さんのほうも、お父さんに家事も子育てもしてほしいと思っている人が増えていて、平等にしてもらわないと困るという女の人が増えてきていると聞いてますからね。もう少し仕事と家庭のバランスが取れればいいと思うんですけど、自分だけ早く帰ったりするのも難しいだろうし、早く帰って、仕事が山積みになっても困りますからね。

⑨ 料理会に参加する父親の印象

息子と同じような年齢のお父さんが参加されているので、かわいいな、と思うんですよ。お父さんと子どものやり取りもとってもかわいいです。このあいだも、お父さんが大好きっていうこどもが参加してて、彼は、本当にお父さんが好きなんです。お父さんとどこにでも行きたいっていう子です。その子が涙ぐんでいるので、どうしたの？て聞いたら、お父さんから、かぼちゃのスープに粒が残っていたことをいわれたみたいで、本当にちょっとしたことだったんですけど、大好きなお父さんに言われたので、泣いちゃって。ああ、かわいいなあと思って。若い人が見るのと、我々がみるのと、もう少し年齢の上の人が見るのとでは、見方、感じ方が違うと思いますよ。

家事をする男性についての見方も、世代によって違うと思います。私の知り合いの娘さんが結婚したんですけど、その知り合いが、「あんなの向こうのお母さんに見せられないわー」、と言ってて。娘さんがじっと座ってて、彼が一生懸命お台所を片付けてるって言うんです。「今日は、彼のお当番」といってすまして座っているって言うんです。娘をもった母親は、相手のお母さんには、ぜんぜん見せられないって言っています。

うちはね、同居に近いけれど、別棟でお母さんと暮らしているので、台所は別なのね。たまたま主人が台所で洗い物をしていたことがあるんだけど、たまたまそこにお母さんが入ってきて、「そんなの洗ってるの」と一言言ったら、それ以来主人は一切やらなくなったの。たまたまやっていたときに、たまたま入ってきて、ずっとやっていると思ったらしいのだけど、わたしも初めてやっていることだって、言いたかったけど、まだいえないころだったので。その一言で、まったくしなくなったの。年代による違いは本当に大きいと思うの。今の、息子たちを結婚させる母親、我々の年齢といったら、夫が家事をするということを理解しているから、息子が家事をしていても、そんなに違和感をもたずに見てもらえるように思います。ここ 10 年くらいで本当に変わってきたと思います。

3. 男性のボランティア活動

（1）事例 5. ボランティア・サークル「ミスターエイト」の活動

個人ボランティアとしての活動

① サークル設立の経緯

1999 年に、民間団体（コープともしびボランティア振興財団）の男性ボランティア入門講座（4 回シリーズ）を受講したメンバーが、講座終了後に結成しました。生協（生活協同組合コープこうべ）にサークル登録をしています。講座の内容は、車椅子の使い方とか障害者の介助方法などでした。メンバーは、13 人で、平均年齢は 67.2 歳。今年で結成 7 年目を迎えました。最初は講座を受けた 15 名でスタートとして、一番多いときは、20 人いたんですが、今は 13 人です。最高齢の方は、84 歳で、サークル設立当初からのメンバーです。もうちょっと若い人に入ってほしいと思っていますが、メンバーを増やすのはなかなか難しいです。メンバーのうちの何人かは、奥さんが一生懸命ボランティアをしていて、講座の受講をすすめられたという人もいます。女性が多いボランティア団体に入っていて、男性ばっかりのこのサークルに移ってきた人もいます。

② 活動内容

月に 1 回、老人施設の訪問をして、車椅子の掃除をしています。その後にお年寄りと交流会をしています。レクリエーションとして、軽い体操、季節の歌や懐メロを歌ったり、手作りの紙芝居も作っているし、南京玉すだれを実演したりします。下手を売り物にしてやっています。皿回しもやります。それ以外にも、月に 1 回、障がい者の若い方の山登りの介助をしています。山登りのときには、環境衛生に協力しようということで、ゴミ袋をもっていって掃除もしています。夏の間のプールの手伝いもしています。ボランティアをやって、お年寄りにも喜んでもらいたいと思っているし、われわれ自身も楽しみたいと思っています。活動内容は、月に 1 回の例会でメンバーが集まって、来月は何をしようかというようなことを話し合います。

③ サークル活動の様子

初めてボランティアに来た人は、車椅子の掃除なんかはすごく一生懸命されますけど、レクリエーションで、人前で歌ったりするのは緊張するみたいで、「私、足が震えた」といっていたメンバーもいました。ずっと裏方でいい、といっていて、一年くらいたって、やっと、みんなの前で歌えたということもあります。でもみんな一生懸命に、車椅子の掃除をしているんですが、メンバーの中には、「家の自転車、磨いたことない」という人もいます。ボランティアで車椅子を磨いて、家の自転車を磨いたことがないのに気がついて、家でも何かしないといけないなということで、ごみを出すようになったり、家族から「お父さん、ちょっと最近変わってきたね」と言われた、という話も聞きます。そういう話を聞いたら、うれしいなと思いますね。

④ 男性ボランティア入門講座に参加した目的

個人的なことなんですが、私の妻は、病気で 60 歳で亡くなりました。そのときに、たくさんの人にいろいろとお手伝いをしてもらって、妻がなくなってから、自分も助けてもらったのだから、今度は自分が何かしないといけないと思っていたんです。ちょうどそのとき、神戸で男性ボランティアの入門講座があったから受講しました。妻は車椅子だったし、いろいろな介護をしました。外に出て、いろんな人と話をすることで、自分もいろんなことが身につきますから。

⑤ 男性サークルの良さと苦労

男性だけだと、何かを決めるとなったときに、早いですね。その一方で、やっぱり、メンバーを集めるのは難しいです。何年か前に、メンバーを募集する記事を新聞に出してもらったんですが、そのときに問い合わせがあったのは、土曜日か日曜日だったら参加させたいという、大学の 2 部に通っている男の子のお母さんからと、不登校の高校生のお母さんからだけでした。その後も何回か募集しましたけど、本当に反応がありませんでした。

⑥ 家族との関わり

妻が、12 年間具合が悪かったので、若いころから、私が家事などをしていました。亡くなる前の 3 年間は、介護を全部自分でやっていました。その当時は、介護保険もありませんでしたから。子どもとの関係でいえば、私の父親が、子どもが好きで、しょっちゅうどこかに私を連れて行ってくれていました。そういうこともあって、自分自身も子どもと一緒に、動物園とかしょっちゅう出かけていました。少年野球を 20 年やっていました。自分の子どもも入れて、毎朝お弁当をもっていって、子どもと一緒に汗を流していました。結構若いときからやってましたけど、楽しかったですね。野球で勝つことも大事だけど、子どもにそういう規律とか、しつけを教えることはやっぱり楽しいですね。野球とかスポーツをやっている子はあいさつもできるし、勉強もそれなりにやっていると思います。

⑦ 個人でのボランティア活動について

個人的に近くの児童センターに月に2回くらい行っています。子どもと将棋をしたり、オセロをしたり、昔の遊びを教えたりしています。夏はキャンプをして、飯ごう炊さんを手伝ったりもします。対象年齢は、幼稚園から、小学校の6年生くらいまでで、キャンプだったら中学1年生くらいまできます。月に1回だけですが、県立こどもの館にも行っています。それから、そのほかに、もう1年ほどになりますが、週に2回ほどスクールヘルパーで、3時から4時半まで、下校のときの見守りをしています。子どものいろんな事件があるから、学校に何も言わないでしょっちゅう道に立っていたら、校長先生が「これ着てください」って言って、見守りにたつときのジャンパーをもって来られたんです。

⑧ ボランティア活動を通しての子どもたちの印象

女の子は元気がいいけど、男の子は元気がない。幼稚園のときから元気がないんです。昔遊びも全然ないし。今の親は、ぜんぜん怒らないでしょう。もっと怒らないといけないと思う。キャンプして、飯ごう炊さんをしても、お茶碗を洗ったことがない。後片付けができません。おもちゃで遊んでも後片付けができない。おじいちゃん、おばあちゃんがいる子は、割合、挨拶もできると思うけど。

昔は、近くの子どもでも、何かちょっとしたものを、アメでも何でもあげたりしたら、その子の親から、ありがとうございましたとか、一言あったけれど、今はそういうことが全然ない。子どもにアメをあげても、子どもどまりで親は知らないし、お礼もない。別にお礼を言ってほしいわけではないけれど、親と子どもの接点がないのかなと思う。やっぱり、親のほうから話しかけないといけないと思います。児童センターに来ても、そんなんあかんで、といっても、家からゲームをもってきてやっている子がいます。おそらく家でも、自分の部屋でゲームをやっているんじゃないかと思います。

今の、お父さん、時々児童センターに来て、こま回しとかするけど、できない人が結構います。個人的な意見かもしれないけれど、子どもが2歳3歳のときまでは、ひざに抱いたりするけど、小学校高学年になっても、もっとお父さんと子どもは一緒に遊ばないといけないと思います。最近は、親と子どものキャッチボールとか全然ないです。お父さんとお母さんが忙しいのは確かだけど、忙しいけれども、子どもと遊んでやったら、それがやっぱり子どもの教育になるし、自分にも返ってくると思いますけど。

第4節　インタビュー調査のまとめと考察

1. インタビュー調査に見る子育て期の父親と子どもの関係、夫婦の関係の現状

（1）子どもと関わる時間がない父親

今回のインタビューから、対象者の多くが「父親は、子どもと関わろうと思っていたとしても、忙しすぎて時間がない」という認識をもっていることが読み取れる。事例4において、参加した父親に対して実施した簡単なアンケート調査の中で、10人の回答者のうち、8人が、平日の労働時間が10時間を超えていて、さらに、そのうちの7人は、1日の往復の通勤時間が100分を超え、「もっと子どもと一緒にすごしたい」と回答した人が8人い

るという結果も、その認識と一致している。

（2）子どもと関わるきっかけをもたない父親

「子どもと関わりたいと思いながらもコミュニケーションのとり方がわからない父親が多い」という回答が、事例 2、事例 3 で見られた。事例 2 の参加者に対して実施したアンケートでは、母親や支援者も含まれているが、26 名の回答者のうち、14 名が「お子様と過ごされるときに、困ったり、戸惑ったりすることはありますか？」という質問に対して、「ある」と回答し、その理由として「叱り方がわからない」「遊び方がわからない」と回答している。インタビュー対象者が参加者親子のコミュニケーションについて問題意識をもっているのは、親自身がもっている認識と一致していることがわかる。

事例 5 においても、「子どもにアメをあげても、子どもどまりで親は知らないし、お礼もない。別にお礼を言ってほしいわけではないけれど、親と子どもの接点がないのかなと思う。やっぱり、親のほうから話しかけないといけない」、「お父さんとお母さんが忙しいのは確かだけど、忙しいけれども、子どもと遊んでやったら、それがやっぱり子どもの教育になるし、自分にも返ってくると思いますけど」という回答に見られるように、父親に対してだけでなく母親とも、遊びや会話の内容について、関わりが少ないと感じていることがわかる。

（3）優しくなってきた父親

今回のインタビュー調査では、事例 1、事例 3、事例 4 において、「今の父親は優しくなった」もしくは「母親が強くなった」という共通の回答があった。それは、イベントの参加の動機について「妻から勧められたから」という回答が多いこと、イベントに参加している父親の様子、そして、日常的に目にする父親と子ども、そして父親と母親との関係から生じた認識のようである。事例 1～事例 4 の取り組みについての情報が、母親の目の触れやすいところにあることで、母親が父親に参加を勧めているという状況もあるが、実際に、事例 1、事例 2、事例 4 の参加者に対して実施したアンケート調査の結果でも、参加の動機についての回答のほとんどが「妻から勧められた」であった。

事例 3 の「お父さんが積極的に自分から参加しようとしているというよりは、お母さんが主導権を握っていて、お父さんはそれにしたがっているという傾向がちょっと見えるような気がしますね」「本当はもっとお父さんに主導権をとってほしいところですが」という回答に見られるように、父親は、子どもと関わることに決して消極的なわけではないが、子どもと何をするか、どこへ行くかということについては、母親の指示に従っているという状況が垣間見える。

事例 4 では、「お母さんとの料理教室よりも、お父さんと一緒のほうが、子どもがのびのびしている」という回答があり、母親は、子どもと日常的に接していることで、教育的立場にあるのに対し、父親のほうが、子どもをおおらかに見守っているのではないか、という印象を抱いているようである。一般的に考えられている、「父親＝厳格」、「母親＝優しい」というイメージとは逆のものであり、興味深い。母親が、家事、子育てを家庭の中で中心的に行なっている家庭では、その役割を果たしていく過程で、父親、子どもに対して

母親の力が強くなっているのではないかと考えられる。

この特徴は、今回のインタビュー調査の対象にしたようなイベントに参加する父親に特有のものであるのかもしれない。言い換えれば、父親が主体的に子どもと関わり家庭の中で主導権をもっていて、自ら、何をするか、どこへ行くかを決定する場合は、別の選択をしているのではないかとも考えられる。たとえば、子どもと父親の得意分野であるキャンプ、魚釣りやレジャー施設などに出かける、もしくは外に出かけなくても、家の中で家事、育児に主体的に関わっている、また、地域のグループなどを結成もしくは参加して子どもと関わろうとするなどの選択肢が考えられる。様々な方法で、子どもと関わろうとする父親が存在する中で、今回の調査で取り上げたような取り組みは、子どもと関わろうとしているが自分からはどうすべきかの答えをもたない父親にとっての最初のステップとなっていると考えられる。

2. 取り組みの成果

（1）父親と子どもが一緒に参加できる場の提供

今回調査の対象とした取り組みは、父親と子どもが一緒に参加できる場としての機能を果たしていると同時に、母親が、安心して父親と子どもを送り出せる場としての機能も果たしている。母親にとっては、事例 1～事例 4 の取り組みは、あえて父親に子どもと一緒に出かけることを積極的に促す上でのきっかけになっているようである。事例 1、事例 3 では、子どもと関わるスキルというだけではなく、仕事や家族の中で活用することのできるスキルや考え方を取り入れたテーマを設定することで、父親の参加を促進している。

（2）父親と子どものコミュニケーションのサポート

子どもとのコミュニケーションのとり方がわからないと感じている父親に対して、コミュニケーション・スキルそのものについて学ぶ講座や、コミュニケーションのきっかけとなる材料を提供することによって、父親と子どものコミュニケーション、また、家族のコミュニケーションを支援しようとしているのが、事例 1～事例 4 の取り組みである。

事例 1 は、子どもとのコミュニケーションのみを対象としたものではないが、コミュニケーションの手法の一つであるコーチングをテーマにすることで、講座で学んだことを家族とのコミュニケーションで活用する機会を提供している。事例 3 の取り組みでは、その場を離れてからも、継続して父親と子どもが関わることのできるような材料を提供することができている。科学実験は、父親が得意とする分野の取り組みであり、家に帰ってからも、作ったおもちゃや学んだことを父親と子どもで共有することができる。仮説を立てて、それを証明していくという考え方は、主体的な子どもを育むことをその目的としているが、それは、親が子どもに向かいあうときの考え方や子育てをする上でのヒントにもなっていると考えられる。

「親子だからきっかけなどなくてもコミュニケーションは自然に取れるものだと思っていたが、そのきっかけをもっていない父親も多い」という現状に対して、きっかけさえあれば、時間はなくても子どもと向かい合う父親も少なくない。また、きっかけを得たことで、子どもと接する時間をつくろうという意志が働くことを、事例 3 から読み取れる。事

例 3、事例 4 の取り組みにリピーターが多いことから、これらの取り組みが父親と子どもが関わる機会を提供したいという目的を達成している同時に、最初は、母親の勧めで参加した父親が、参加によってより主体的に子どもと関わろうとするきっかけになったことが読み取れる。

（3）多世代交流

事例 5 は、男性がボランティア活動を通して地域に、そして地域の子どもに関わっていく事例として取り上げたが、核家族化が進む現代の家族にとって、児童館や登下校時の地域の人との関わりは、子どもたちにとっての日常的な多世代交流の場となっていることがうかがえる。事例 4 においても、「息子と同じような年齢のお父さんが参加されているので、かわいいな、と思うんですよ」という回答に見られるように、主催者にとっても父親にとっても日常的には関わることの少ない、地域の中での多世代交流の機能を果たしていることがわかる。

3. 今後の課題

（1）父親同士、父親と地域のネットワークの形成

事例 1～4 の取り組みやイベントは、それだけで終わってしまうとその場限りの取り組みに過ぎなくなってしまう。すでに、これらの取り組みがその場限りのものではなく、父親と子どもに継続的なコミュニケーションの材料を与えていることができていることはすでに述べたが、それに加えて、今後求められていくのは取り組みに参加する父親同士、また、父親と地域のネットワークの形成である。

それぞれの取り組みにおいて、講師と参加者という個別のつながりだけでなく、参加者同士の横のつながりを視野に入れたプログラムを展開することで、父親同士の職場以外でのつながりをつくり、日常的に子育てをめぐるネットワークを形成することができる。それは、母親に対して求められているのと同様、子どもと向かい合うときのアドバイスや情報交換を可能にする。また、取り組みの場における、地域の活動や団体の取り組みの紹介によっても、より日常的な子どもをめぐる父親同士のネットワークや、また父親だけに限定せず、母親とのネットワークの形成につながる可能性もあるだろう。

今回対象とした取り組みは、子どもに関わる上での最初の一歩を支える取り組みとしての機能は十分に果たしているが、その機能をより効果的に高めるためにも、今後の課題として、ネットワークの視点を取り入れていくことも重要であると考えられる。

なお、父親同士のネットワークが生み出す可能性については、第 3 章で詳しく議論したい。

（2）支援者同士のネットワークの形成

地域の子育て支援等に関わるグループや人材同士のネットワークによって、もっと総合的に父親と子ども、そして、家族を支援していく仕組みを作っていくことも重要である。母親を対象とした支援同様、父親と子どもを対象とした取り組みが増えてくる中で、地域の中で行政と NPO などが同様の取り組みを行なっていたり、連携して行なえばより効果

的な取り組みが個別に行なわれている状況がある。こういった取り組みを連携して行なうためには、情報の共有や人材の交流が必要である。子育て支援の分野においてこういった場の設置や仕組み作りは民間から呼びかけるよりも、行政が実施することが効率的であると考えられる。地域単位、行政区単位での支援者のネットワーク作りも今後の課題といえる。

（3）父親と子どもが関わる時間の創出

今回のインタビュー調査から、回答者は、それぞれの取り組みによってコミュニケーションのきっかけ作りはできても、やはり、父親と子どもが関わる時間そのものを確保するためには、企業のワーク･ライフ･バランスに関する制度の整備や、その制度を利用しやすい企業風土が必要であると感じていることが読み取れる。「男性も含めた働き方の見直し」は 2005 年 4 月施行の「次世代育成支援対策推進法」にも取り上げられている一方で、就労者の仕事と家庭生活の両立支援策充実の優先的な課題は､「ルーティンな両立支援策を充実させること」（松田茂樹 2006：4）であり、また、「育休・勤務時間関連の施策の充実を求める割合は、男性正社員と女性正社員で同程度」であり、両立支援のために「勤務地や担当業務を限定する制度、所定外労働の削減措置、年次有給休暇の取得促進は、女性正社員よりも男性正社員の方が求める割合が高い」（松田茂樹 2006：14）という現状もあり、企業における制度の充実は、男性自身の側からの要請でもある。

確かに、事例 3 でみられたように、講座の日に休みをとるため、日曜日に仕事に行ってでも講座に参加する父親の姿は、企業の中に制度がなくても本人の意思ややり方しだいで子どもと関わる時間を創出することはできるという一例であるが、それによって父親にかかる負担の大きさは計り知れない。父親だけでなく母親も含めて、就労者が子どもとより日常的に関わる時間を確保できるということは重要な課題であり、企業の自発的な取り組みに期待されるとともに、行政や NPO 等からの企業への働きかけや、就労者自身の意識改革も必要となるであろう。

その上で、時間の確保とコミュニケーションのきっかけ作りは、どちらか片方を行なえば十分というものではなく、子どもと向かい合う時間を確保した父親に対して、今回調査対象とした取り組みのような、コミュニケーションのきっかけや場を提供する取り組みの更なる充実が必要である。そしてその取り組みは、行政や NPO によって行なわれるだけでなく、企業の中でも展開されることがのぞましい。実際に、企業の中では、すでに父親の職場を子どもが見学に来る日を設けている企業もあり、今後の企業の取り組みに期待される。

4. まとめ

今回の調査から、子どもと関わろうとする父親が増えている中で、実際には、父親はその時間を取ることが難しく、さらに、子どもとのコミュニケーションのきっかけをもたない父親が多いこと、そして、今回対象とした取り組みが、父親と子どもが関わる場の提供と、コミュニケーションのきっかけの提供について大きな役割を果たしていることがわかった。さらに、提供しているコミュニケーションのきっかけは、その場限りのものではな

く、その場を離れてからも継続的に活用されうるものであった。父親と子どもの関わりは、家庭をめぐる様々な問題を考える上での社会的な要請であると同時に父親の側からの志向でもあり、父親と子どもを対象とした取り組みは今後も一層その必要性を高めていくと考えられる。

その一方で、ある意味で、今回インタビューの対象とした取り組みに参加する父親は、子育てに向かう上で、すでにいくつかのハードルをクリアしているといえる。今回対象とした取り組みでは、父親が、子どもと関わりをもたない、もてない、またもつ必要がないと考えている場合、その意識を変えることは難しい。

今後、求められるものは、今回対象とした取り組みにおいて蓄積されたノウハウや父親の状況についての認識を、行政や NPO が連携して企業の中で活用するなど、より父親の日常のフィールドに近い部分で子ども、家族について考える場を父親に提供していくことであると考えられる。

第 3 章　コミュニティにおける父親の連帯

第 1 節　はじめに

現在、全国各地で、次々に「父親の会」が結成されている。参加しているのは、主に同じ小学校や中学校へ子どもを通わせている父親たちだ。彼らは、「子育て」という共通の関心事をもつ者同士として、互いに連帯を深めようとしている。

小学生や中学生の保護者が関わる組織といえば、まず筆頭にあげられるのはPTAだろう。しかし、従来、PTAの活動に参加してきたのは主として母親たちであった。福岡市にあるNPO法人「男女・子育て環境改善研究所」が、2002 年に北九州市内の公立小学校PTA会長および「おやじの会」関係者を対象に実施した実態調査の結果を見てみよう。PTA総会への参加状況を尋ねた問いに対して、「参加者全体の 3 割以上が父親」と答えたのは、回答を寄せた 59 校のうちわずかに 1 校（1.7%）、「1 割程度」は 16 校（27.1%）で、「父親はほとんど参加しない」は 41 校（69.5%）にものぼった（1 校は無回答）[3]。

また、同じグループが同年に北九州市内の公立小学校 7 校の保護者を対象に行なった調査では、過去 1 年間に 1 度も PTA 行事へ参加しなかった男性保護者 278 人に対し、不参加の理由を尋ねている（複数回答）。その結果を見ると、「仕事が忙しくて時間が取れない」が最も多い 217 人（全体の 78.1%）、次いで、「子どものことは妻に任せている」が 44 人（同 15.8%）、「PTA のことには関心がない」が 31 人（同 11.2%）、「PTA は女親が出ればいい」が 10 人（同 3.6%）となっていた（北九州市立男女共同参画センター“ムーブ” 2003）。

これらのデータから、PTA 活動に参加するための時間がないことや、そもそも PTA との関わりをもとうという意識が希薄であることにより、PTA と父親の関係がきわめて希薄となっている様子が読み取れる。

こうした状況は、北九州市に限らず、ほぼ全国的な傾向として捉えても差し支えないだろう。PTA 会長や副会長などの役員に父親が就任している学校は少なくない。ただし、そんな学校でも、諸々の活動を行なう際に必要な役割を分担し、与えられた任務を実際にこなす、あるいは行事などに参加しているのは母親である、というところが大半である。前章で見たとおり、育児や家族をめぐる男性たちの意識に大きな変化が生じているのは、ほぼ間違いない。しかし、自分の子どもが通う学校の PTA に対しては、参加したくても参加できない、もしくは、関心を払わないという父親がほとんどなのである。

では、このような現状と照らし合わせてみて、冒頭で述べた父親の会が全国各地で結成されている事実をどう理解すればよいのだろうか。そこで本章では、父親の会の活動に焦点を当て、このような動きが加速した背景や実際に行なわれている活動の内

[3] 本調査の集計結果では、「おやじの会」がない学校 33 校とある学校 26 校を分けて表示していたが、ここでは両者を合計した 59 校中の割合を計算した。

容を明らかにする。そして、子育て中の父親たちが互いに手を結び、ともに活動しながら、家族との関係を見つめ直し、学校やコミュニティとの関わりを深めていく過程をたどることで、父親の会の活動がどのような意味をもっているのかについて検討する。最後に、どのような要因が父親の会の活動を活性化させるのかという点を考察したい。

第 2 節　調査の概要

このテーマに取り組むにあたって、筆者らはまず兵庫県内における 29 市 12 町すべての教育委員会へメールを送り、「管轄する小・中学校で、『父親の会』が活動しておられたら、どんな些細な情報でも構わないので、是非お知らせいただきたい」という旨を伝えた。当然、教育委員会がすべての父親の会について把握しているとは限らないだろう。しかし、何らかの情報を握っている教育委員会も少なくないのではないかと考えたのである。2006 年 9 月 22 日に情報提供を依頼した後、同年 10 月 10 日までに 19 市町からメール・電話・ファックスによる回答が寄せられた。その結果は、「父親の会は存在しない」、あるいは「何も情報をもち合わせていない」と答えた自治体が 13（9 市 4 町）、一方、「父親の会がある」、あるいは「多少なりとも情報を得ている」と答えた自治体が 6（4 市 2 町）であった。後者がいずれも兵庫県の南東部に位置する自治体であったことは、非常に興味深い。

この後、「父親の会がある」と答えた自治体の担当者に連絡を取り、調査の趣旨を説明した上で、具体的な小・中学校名を教えていただいた。さらに、「各学校に聞き取り調査へ協力していただくことは可能か」と尋ね、「特に問題はない」と判断された場合は、校長や父親の会代表者を紹介していただいた。以上の手順を踏んで、2006 年 10 月から 12 月の間に、5 つの小学校で父親の会に関する聞き取り調査を実施した。

これと並行して、インターネットによる情報収集も行なった。父親の会には、インターネットのホームページで、活動の内容などを知らせる文章や写真を公開しているところが少なくない。その中には、小・中学校が運営する公式ホームページの一部を使っているところもあれば、父親の会が独自のホームページを作成しているところもある。これらを参照することによって知り得た、兵庫県内にある 2 つの父親の会に対し、聞き取り調査への協力を依頼した。いずれの父親の会からも快諾が得られ、世話役担当の父親たちに対する聞き取り調査を行なった上、実際の活動の様子も何度か見学させていただいた。

このほか、知人の子どもが通学している小学校の父親の会からも協力が得られ、聞き取り調査と参与観察の機会をもつことができた。さらに、ある小学校の父親の会代表者に対する聞き取り調査を実施した際、「活発な活動を展開しているグループがある」と教えていただいたこともあった。その父親の会は、すでに子育てが一段落し、退職後、第二の人生を歩んでいる男性たちが中心メンバーとなっている点で、それまでに調査した父親の会とは少し性格が異なっていたが、子育ての「現役世代」ではない男性たちがどのような意図で活動を行なっているのかと、興味をそそられた。早速

そのグループに問い合わせると、聞き取り調査に応じていただいたばかりではなく、活動の見学も勧めてくださった。このように、今回の調査研究を実行するにあたっては、「口コミ」も貴重な情報源となった。

結局、今回の調査研究の対象となったのは、県内の 9 つの父親の会である。父親の会の代表者に対する聞き取り調査は、以下のような質問項目リストに沿って進めた。また、そこで聞き取った内容をおおまかにまとめたものが、第 3-2-1 表である。

父親の会の代表者に対する質問項目

①正式名称
②発足年
③会員数および役員数
④活動に参加している会員数
⑤会員の募集方法
⑥母親の参加の可否
⑦会則の有無
⑧定例の活動日
⑨運営資金
⑩発足の経緯（きっかけ）
⑪活動の趣旨
⑫主な活動
⑬主な活動場所
⑭会が所属する組織（PTA、公民館、自治会や育成会、所属組織なし）
⑮学校との連携
⑯地域との連携
⑰現在の課題
⑱今後の展望

第 3-2-1 表　対象となった「父親の会」の概要

名称	結成年	会員数（調査当時）	運営資金	主な活動	主な活動場所	調査日
A 小学校父親の会	1999 年	在校生と卒業生の父親、83 人	PTA 交付金／神戸市福祉協議会委託金	月 1 回の定例会／広報誌の発行／1 学期 1 回の親子イベント（お泊り会等）	小学校	2006.10.14 2006.10.21 2006.11.18 2006.11.19
B 小学校父親の会	1982 年	在校生の父親、約 120 人	イベント参加者負担／PTA からの補助金	勉強会／学校との懇談／親子イベント（ゲーム、夏祭り等）	小学校	2006.10.18 2006.10.28
C 地区父親の会	2006 年	C 中学校区在住で活動の趣旨に賛同する男性、37 人	イベント参加者負担	地域に関する勉強会／討論会／旅行／親子イベント（そば打ち・まち遊び等）	集会所	2006.10.21 2006.11.12 2006.12.16 2007.1.27
D 小学校父親の会	2004 年	在校生の父親、約 20 人	兵庫県チャレンジファミリー地域応援事業助成金／PTA・地域団体からの補助金	月 1 回の定例会／ビオトープ整備／ホタルの飼育／親子イベント（凧作り、キャンプ等）	小学校	2006.10.24
E 小学校父親の会	2003 年	小学校区地域に関心のある人、約 30 人	子どもゆめ基金(国立青少年教育振興機構)	月 1 回の例会／親子イベント（コンサート、親子ミュージカル等）	小学校	2006.10.31
F 小学校父親の会	2002 年	会員登録はせず、イベント毎に全校の父兄へ参加を呼びかける。	なし	年 1 回の愛校デー参加／廃品回収／親子イベント（凧作り、花壇作り等）	小学校	2006.10.31
G 小学校父親の会	2001 年	会の趣旨に賛同する人、約 10 人	兵庫県地域づくり活動応援事業助成金／町内会からの補助金	年 8 回のイベント（花壇整備、うどん作り、街の美化活動等）	小学校区地域およびその周辺	2006.11.10
H 小学校父親の会	1994 年	在校生と卒業生の父親、約 10 人	イベント参加者負担	年数回の親睦会／イベント（山菜狩り、しめ縄飾り用のウラジロ採り）	小学校区地域およびその周辺	2006.12.12
I 町父親の会	2003 年	小学校区在住の男性および小学校在校生の父親、44 人	町内会・子ども会・老人会からの補助金	定例会／小学生登下校時の見守り／週 1 回の夜間防犯パトロール	小学校区地域	2006.12.21

さらに、9 つの父親の会うち、A 小学校父親の会、C 地区父親の会、それから I 町父親の会では、メンバーの方々へ個別に協力をお願いし、延べ 12 人から、参加動機や活動の前後における意識の変化などについて、詳しく聞かせていただいた。この聞き取り調査にあたって、あらかじめ用意した質問項目は、以下の通りである。

父親の会のメンバーに対する質問項目

◆フェースシート

①氏名
②生年月日
③職業（初職、現職、職種、事業所住所、事業所規模）
④学歴
⑤住所（生誕地、現住地）

◆定位家族

①家族構成
②両親（しつけ・教育観、父と母の関係、対象者と両親の関係）
③きょうだい関係
④家族に関する思い出

◆学校

①通学した学校
②学校での体験、思い出

◆職場

①就職した理由
②仕事内容
③両立支援への取り組みとその実効性

◆生殖家族

①家族構成
②育児の方針
③家族が大切にしていること
④休日の過ごし方
⑤現在の課題

◆父親の会

①参加動機
②参加してみて感じること
③父親の会に期待すること

◆地域活動

①内容
②父親の会との違い

以下、これらの父親の会について概観しよう。

第 3 節　「父親の会」の結成

父親の会は、どのような経緯や目的から作られてきたのだろうか。まずは、この点から探りたい。

1. もっと父親を学校へ

今回の調査対象となったグループの中で、もっとも早く結成されたのは、B 小学校の父親の会である。今から 25 年も前の 1982 年、当時 PTA 活動の中心にいた母親たちが、もっと父親に PTA 活動へ携わってほしいと考え、「父親懇談会」を立ち上げたのが始まりだという。その後長らくは、PTA の母親たちが会の企画を担当し、父親は決められた日時に討論へ参加するだけという形式が続いたが、2001 年に父親自身が会を運営する「創造型の父親の会」への転換を図り、現在に至っている。

その他の父親の会は、2000 年前後に発足したところが多い。しかも、会が結成された目的として、「父親が学校や PTA にもっと関与できるような機会を創りだすこと」をあげたところがほとんどであった。2000 年といえば、少年の凶悪犯罪が多発したことなどが背景となり、子どもの養育に対する父親の役割の重要性が社会全体で盛んに議論されるようになった頃と重なる。そんな時代状況が、父親たちの関心を学校や PTA へ向かわせたのだろう。なかでも、PTA 会長や副会長などの役員を務めている父親は、自らが日常的に学校との密接な関係を築いていることから、「もう少しお父さん方を学校に引っ張りこんで、お母さんだけでなく、お父さんも一緒に教育に携わろう」（F 小学校父親の会の代表）という意識が強い。しかし、PTA 活動や学校行事は平日の昼間に行なわれるところがほとんどで、サラリーマンの多くはそれらに参加することが難しい現状にある。こうした事情から、調査対象となった父親の会のほとんどは、PTA 役員の父親や校長らにより、PTA とは別の組織として結成されたのである。

9 つの父親の会の名前を見ると、「おやじ」や「父親」など、会員の属性を特定するような言葉を含むところが 7 団体ある。その理由は、今述べたような結成の目的があるばかりではない。たとえば、D小学校で父親の会の設立に携わった同校の校長は、次のように述べている[4]。

> とにかく、おやじの背中を見せて教育をしよう。子どもたちに「ああしろ、こうしろ」言うんじゃなくて、おやじが自分から進んでやっている姿を見て子どもは育つもんだと。お父さん方が学校にやってきて、いろんな活動をしているのを子どもが見たら、何かの刺激になって、それがいい教育になるんじゃないかと。あえて言葉で言うよりも、態度で示そうじゃないかということで、呼びかけをさせてもらったんですね。

つまり、あえて「おやじ」や「父親」の会であることを前面に出しながら、「父親」

[4] ただし、D小学校の父親の会の場合、当初は「おやじの会」としてメンバーを募集したが、会の設立後は、「おやじ」や「父親」という言葉を含まない、別の名称に変更された。

として活動を展開していくことの意義を自ら確認しつつ、子どもたちにもそれを積極的に伝えていきたいという意図が、そこには込められている。

これとは別に、以下の語りに見られるとおり、会の名前に「おやじ」や「父親」という言葉が含まれていれば、父親たちが気軽に参加しやすいのではないかという配慮もあるようだ。

> 最近は若い方がかなり学校へ来られているようですけど、田舎のことですから、お父さんが出てくるというのは、なかなかきっかけが見つからない。だから、お父さんの会を作れば、学校へ来やすいん違うかなということで。名前も「おやじ塾」にしておいた方がええんかなと（G 小学校父親の会設立者）。

いずれにせよ、多少なりとも学校教育へ関心を抱いてきた父親たちが、父親の会の誕生によって、学校との関与を深めるきっかけをつかんできたといえるだろう。

2. 父親同士の関係作り

父親の会を結成した目的として、父親の仲間作りもきわめて重要である。男性が地域社会で取り結ぶ人間関係が概して希薄であることは、第 1 章で繰り返し述べた。現在の居住地に転入してまだ日の浅い人であれば、なおさらその傾向が強いのは言うまでもない。

近年、鉄道の発達により、都市部への通勤・通学に要する時間が大幅に短縮されるなど、郊外住民にとっての利便性が飛躍的に高まった。それにともない、都市部周辺へ転居しようとする人々が選択しうる地理的な範囲はますます拡大している。こうした地域に立地する D 小学校には、神戸市へ通勤するサラリーマン一家の子どもの転入が絶えない。校長の考えによると、「（転入者の中でも）女性はどんどん地域へ出て行くけど、男性は案外、子どもを交えての地域での付き合いが本当に下手な人が多い」。そのため、「なかなか地域に溶け込めない方が、PTA の会員であるというだけで、『ほな、行こうか』と気軽に入っていける会。困ったとき、つらいとき、人と話がしたいときに、そこに行けば仲間がいるという場所があることは、大事なんちがうかな」という。校長自らの体験にも基づくこうした思いが、同校における父親の会の誕生へと結びついたのである。

また、兵庫県東部の新興住宅地に位置する H 小学校の場合は、創立から 10 年あまりの新設校である。同校の周囲では現在も一戸建て住宅が次々と建設されており、毎年多くの転入生がやってくる。インタビュー調査で訪問した時点では、全校児童の 99%が他所からの転入者で、残りわずか 1%が新興住宅地の周辺地域に以前から住んでいた家庭の子どもであった。この小学校に父親の会が設立されたのは、学校の創立の翌年である。父親の会と親密な関係を築いている同校の校長は、当時の PTA 会長には「新しい地域なので、何かをしないことには（父親同士が：筆者）繋がれないという思いが根底にあったのではないか」と推測する。父親の多くは神戸市や大阪市などへ通勤するサラリーマンであるため、子どもの通う小学校が同じというだけでは父親同士の

親しい付き合いが生まれにくいと考えられたのだろう。校長によると、父親の会のメンバーは、「行く行くは地域に根付いて生きていこう」と考え、「職場以外の人間関係を大切にされる方々」であり、すでに子どもが小学校を卒業した人たちも、会への参加を通して「ずっとつながっている」という。

以上から、父親の会が設立された意図として、小学校区へ新たに移り住んできた父親たちに対するコミュニティの受け皿となることが含まれているといえよう。そうだとすれば、鉄道の高速化といった交通網の整備やそれにともなう新住民の増加が、父親の会発足を促す一要因となっていると考えられる。今回の調査対象となった父親の会が、兵庫県の南東部、つまり阪神間とその周辺地域に偏っていた理由も、こうした社会背景と何らかの関連を有しているのかもしれない。

3. 地域の子どもたちのために

父親の会の中には、「子どもたちをコミュニティで育てよう」という意図から出発したところも少なくない。

E 小学校の父親の会は、2003 年に「PTA を支援する団体」として設立された。当時、PTA の会長を務めていた K 氏は、立場上、多くの男性と話す機会があり、その中で、「最終的には自分の子どものためになるという前提ですけど、『地域の子どもたちのために何かしてあげてもいいな』と考えている人がたくさんいるなということを、非常に感じた」という。また、「月 1 回くらい、お互いに情報交換をしながら子どもらの現状がわかれば、自分の子がどうや（どんな様子なのか：筆者）というのがわかっていいかなと思い、気軽にできるようなことを始めた」と、父親の会設立の背景を語った。

こうして K 氏が中心となって立ち上げた E 小学校の父親の会は、子どもの体験活動を支援する機関からの助成金を得て、年に 1 度、学校を会場として、ミュージカルやコンサートの鑑賞会などを開催する。「親としても、なかなかミュージカルというのに子どもを連れて行ってあげられないのに、それが学校に来てくれる」のが魅力だ。しかも、その恩恵を受けられるのは、E 小学校の関係者に限らない。「地域の人って、自分らの地域の子はかわいいと思ってくれていると思うから、こちらからまず来てもらおう」というのが、K 氏らの思いである。

このような考え方は、父親の会の参加資格にも反映されている。規約の参加資格を見ると、「○○市の△△地区(E 小学校のある地域：筆者)に関心のある人」と記されており、E 小学校の「父親」にそれを限定していない。会の運営を主に担っているのは父親たちであるが、母親はもちろん、E 小学校に通う子どもをもたない人、さらに、この地域に住所や勤務先のない人であっても、「楽しそうやから、僕も参加したい」と思えばいつでもメンバーとなることができるのである。ここからは、父親の会が実施する様々な体験活動を通して、コミュニティ全体で子どもたちの育成を図っていこうという趣旨がはっきりと読み取れる。

これと類似した目的から誕生したのが、I 町の父親の会だ。I 町のある自治体では、数年前からひったくりや空き巣などの犯罪、タバコや空き缶のポイ捨て、ゴミの不法投棄などが目立って増えてきた。こうした事態を懸念する自治会の女性たちが男性た

ちに呼びかけたのが、会の発足のきっかけである。I 町は、1995 年に起こった阪神・淡路大震災の被災地域だ。震災の発生直後、速やかに組織された自警団へ自主的に参加し、コミュニティの大切さを再認識した住民が少なくないという。そうした人々が父親の会結成に対する呼びかけに応じ、コミュニティにおける犯罪の抑制やマナーの向上を推進する目的で、2003 年にこの団体を立ち上げた。活動の一環として、I 町の子どもたちが通う小学校と協力し、登下校時における見守り活動と挨拶指導を毎日続けているほか、小学校や幼稚園からイベント時の力仕事に対する協力要請があれば、それらにも積極的に応じている。

このグループのメンバーの大多数は、育児期の「父親」ではなく、すでに職業生活を終えた中高年の男性住民であるため、厳密には「父親の会」と呼ぶことができないのかもしれない。ただ、活動を通して、メンバーが「コミュニティ全体のお父さん」を自負するようになっていること、また住民からもそうした役割を期待され、かつ、おおいに感謝されていることなどの点において、前にあげた E 小学校の父親の会と重なり合う部分が多い。

E 小学校と I 町における父親の会が結成された経緯を見てみると、近年のコミュニティに対する意識の高まりが、父親たちによるグループ形成を推し進めているといえよう。その背景には、犯罪の多発や環境の悪化といったコミュニティ問題の顕在化が見て取れる。また、兵庫県独特の事情としては、大災害の体験と住民相互の助け合いに対する価値観の共有が父親の連帯を後押しした可能性も見逃せない。このほか、コミュニティの一員として子どもたちの育成に携わろうとする視点を活動の基盤に据えているからこそ、グループへの参加資格を「父親」に限定するのではなく、より多くの市民と繋がることのできる仕組みを作り上げているという点にも注目したい。

第 4 節　「父親の会」の活動内容

父親の会が展開する活動は多種多様にわたっているが、大雑把に分類すると、①親子で行なう活動と、②父親（メンバー）のみで行なう活動の 2 種類がある。各々について、詳しく紹介しよう。

1. 親子で行なう活動

（1）みんなで楽しもう

多くの親は、「子どもたちに豊かな感受性や社会性を育んでほしい」と願う。そうした思いをもとに、父親の会では、家族が単独で行なうことは難しい、あるいは、大勢で行なったほうが楽しい活動を展開している。

ア　イニシアチブ・ゲーム（仲間作りゲーム）

B 小学校の父親の会では、2006 年 10 月のある日曜日に、学校で「イニシアチブ・ゲーム」という遊びを親子で実施した。企業研修などでも採用されているというこのゲームは、「仲間作りゲーム」とも呼ばれる。ルールは簡単で、参加者がいくつかのグ

ループに分かれた後、与えられた課題に取り組んでいくというものである。ただし、その課題は、グループ内の十分な話し合いと助け合いがなければ、こなしていくことのできない内容となっている。

当日、見学に訪れると、約 300 人の親子が朝から運動場に集まっていた。そこで出された課題は全部で 8 つ。「2 メートル四方のブルーシートを使って、折鶴を作る」、「跳び箱（1 段）の上に、大人 2 人とグループ内の子ども全員（4～5 人）が乗る」、「一人を除いて全員がアイマスクをつけ、アイマスクをつけていない人を最後尾として一列に並ぶ。その後、アイマスクをつけていない人の指示に従い、障害物をうまく避けながら前に進む。」などがあった。今回初めて顔を合わせた者同士でも、相手を信頼し、互いに協力関係を結ぶことが要求されるので、参加者はみんなで声をかけつつ体を動かしていた。それだけに、課題を達成した後の充実感は大きいようで、参加者らの晴れ晴れとした表情が印象的であった。

ゲームが終わったのは、ちょうど正午頃。昼食は、父親の会のメンバーを中心とするこのイベントの実行委員らが作った特製カレーに、参加者がグループごとに飯ごうで炊くご飯である。父親の中に、香辛料を扱う会社や米を扱う会社にそれぞれ勤務する人がおり、普段食べるものとは一味も二味も違う美味しいカレーと、カレーライス向けに品種改良されたという米を、みんなで賞味した。おかわりをするため、カレーの鍋の前に並ぶ人の列を見て、実行委員らはとても誇らしげである。この日の活躍を通して、彼らが大きな満足感を得たことは、明らかだろう。

イ　学校探検

A小学校の父親の会は、2003 年以降、夏休みに「学校探検」を行なっている。子どもたちは普段、多くの時間を学校で過ごしているものの、日暮れ後に学校で過ごす機会は皆無に等しい。そのため、「みんなで夜中に学校を探検すると楽しそうだ」という父親たちの遊び心が、この企画を実現させたという。父親の会のメンバーは、事前に何度も集まって念入りな話し合いを重ね、みんなが楽しめるような催しを行なうために知恵を絞る。内容は毎年少しずつ変わるものの、「プールやゲーム遊び」、「夜の学校探検」、「学校敷地内にある福祉センターでの宿泊」[5]が主なメニューである。また、第 2 回目の学校探検からは、「絆」、「命」といったテーマを毎回決めて、それについて参加者全員で考える時間も設けるようになった。当日は、父親の会メンバーの子どもはもちろん、会に参加していない親子や教員らも参加し、いつもと違った表情を見せる学校で、楽しい夏のひとときを過ごす。一方で、会のメンバーは、夕食としてみんなで食べる焼そばやカレーライスを作ったり、学校探検のための仕掛けを用意したりと、忙しく動き回る。

この父親の会が発行する広報誌には、学校探検に参加した 6 年生の感想文が掲載されている。それを見ると、「暗い学校だったから、おもしろかった」、「命というテーマでいろんな遊びをしました。命の大切さを改めて知りました」、「(父親の会メンバーに

[5] ただし、宿泊にも参加できるのは、6 年生のみとなっている。

対して：引用者）ぼくらが寝るまでおきていてくれたり、食事も用意してもらって、ありがとうございました。」、「小学校生活最後の楽しい思い出ができました。また来年も計画して、今の 5 年生にも同じことができますように」といった声が寄せられている。子どもたちが非日常的な活動を満喫し、そこから様々なことを学び、他人に感謝する気持ちをもった様子が伝わってくる。

このイベントへの参加が貴重な体験となったのは、子どもたちだけではない。同じく広報誌に載せられた父親たちの感想文が、それを顕著に示している。一部を引用してみよう。

・今回、授業参観などとは違った形で、子どもと構内を歩き回り、子どもの過ごす環境を知ることができました。

・企画から準備、実行を通して、私たち親父の感想は、第一に『疲れた』。しかし、子どもたちの驚く顔、喜ぶ顔が疲れを癒してくれました。

・個人的には、今回のイベントを実行していく中で、○○（父親の会の名前：引用者）の活動に会社以外での自分の存在場所が新たにできたような気持ちになりました。子どもたちが生活する学校、その地域の中で、父親として楽しく、そして少しは努力をして何ができるかを考え、自然体で活動ができることに、非常に魅力を感じます。子どもが卒業しても、私のライフワークの大きな一部として、取り組むことになるような気がします。

これらの文章を読むと、イベントに参加した父親たちの中には、わが子を取り巻く環境についてより理解を深める機会を得たほか、わが子以外の子どもたちとのふれあいを楽しみ、自分自身を見つめなおしながら生活のあり方そのものとじっくり向き合うようになった人もいることがわかる。

ウ　プレーパーク作り

G 小学校の父親の会では、町内会などの地域組織と協力し、移転した幼稚園の跡地で、花や野菜を育てる「プレーパーク」作りとその維持・管理に力を入れている。メンバーの中に造園業に従事する人がおり、全面的な協力が得られた。野菜が食べ頃を迎えると、みんなで収穫してそれをもち帰るのが楽しいという。また、「うどん作り」もこの会の主なイベントだ。小麦粉で生地を作る段階から始めるので、かなりの手間を要するが、「自分で作ったやつを自分で切って、それを湯がいて食べれば、『美味しい』と子どもが喜ぶ。それに結構これはお父さん、みんな参加されますね。力がいるんでね」（父親の会世話役）とのことである。手塩にかけて育てた野菜や手作りのうどんが美味しいということだけではなく、兄弟姉妹や親のほか、大勢で何かを作り上げることの楽しさや面白さが、これらの活動の醍醐味といってよいだろう。

以上のように、家族の枠を超えて、職業の枠を超えて、父親と子どもたちが交流することにより、参加者が互いの距離を縮めながら多くの人と繋がることの大切さを学んでいく様子が見て取れる。こうしたプロセスを経て、父親も子どもも、より広い社会へと視野を拡大していくことができるのだろう。

(2)「父親の会」だからできる取り組みをしよう

父親の会が行なう親子の活動では、学校教育や子ども会などにおいて行なうものとはできるだけ異なる取り組みを企画・実施しようという傾向も強い。つまり、父親の会としての強みを活かした活動が展開されているのである。

ア　ホタルの飼育とビオトープ作り

D 小学校の父親の会では、発足時に、地域の子ども会の活動とは違った形の活動ができないかと議論を重ねた。その中で、「学校の中庭でホタルが飛んだら素敵やね」という声が上がり、これをきっかけにホタルの飼育に取り組むことが決まった。とはいえ、当初はホタルを飼うための基礎知識が皆無であるばかりか、ホタルを見たことすらない父親も少なくなかった。そこでまず、兵庫県内のホタルの生息地へ家族を伴って出かけていき、本物のホタルが乱舞する様子を見学するところから始めたという。その後、専門家を招いて、ホタルの飼育に関する勉強会を開き、ホタルが住めるような池が必要なことを知る。今度は池作り専門の業者に協力を依頼し、中庭に水の循環装置を備えたビオトープを作る作業に乗り出した。父親の会のメンバーには、「水道屋さんがおるし、電気屋さんがおるし、ユンボ（油圧式ショベル：筆者）やダンプとかもってる方がいっぱいいて」、いざ作業に取りかかろうという段階になると、「すごい動員力だった」(D 小学校校長)という。

ビオトープが完成すると、ホタルの餌になるカワニナを用意して、いよいよホタルの幼虫の放流である。当日は、父親と子どもたち約 60 人が参加し、ホタルの生態について学んだ後、20 匹の幼虫をそこへ放った。その後はみんなで、ホタルの成長を楽しみに待った。ようやく 1 匹のホタルが宙を舞う姿が確認されると、さっそく全校にそれを知らせる案内が配られ、1 週間の夜間学校開放が実施された。毎晩 100 人ほどの大人と子どもが学校を訪れ、みんなで必至にホタルを探したが、その間に見ることができたのは全部で 3 匹ほどだったそうだ。しかし、たった 1 匹でもホタルが見つかったときは、「『いた！いた！いた！いた！』言って、ものすごい感激の声があっちこっちでしました」と校長は話す。そこにいた人々の喜ぶ姿が、容易に想像できる。

翌年になると、地元にある組織団体からの経済的協力も得て、前年に作ったビオトープの横に、さらに大きなビオトープを誕生させた。そこへ放すホタルの幼虫の数も大幅に増やした結果、その年は毎晩 15 匹から 20 匹のホタルを鑑賞することができた。父親の会では、校内でホタルが見られた場所や確認された数を毎日記録に残した。今後、ホタルの鑑賞がしやすいように、ビオトープの周りに道を作ろうという計画ももち上がっているという。

このように、D 小学校の父親の会は、ホタルの見学に始まり、ホタルに関する勉強会、ビオトープ作り、それからホタルの飼育を経て、ホタルの鑑賞会を実施するまでの息の長い取り組みを行なってきた。それぞれの作業は多くの時間と労力を必要とするものであり、学校や子ども会などが手掛けるにはなかなか困難な側面が多い。一方、一日や一年といった時間の制約に縛られず、力仕事も得意とする父親たちの会が、こ

れに取り組むことで、当人たちはもちろん、子どもたちも学校でホタルが飛ぶ姿を見たり、ホタルについて学んだりできる。こうして、親子で、父親同士で、かけがえのない体験を共有できるのだ。

また、ビオトープを作る際にそうであったように、様々な職業をもった人たちが、得意分野で力を発揮できるというのも、父親の会ならではの強みだろう。常日頃、仕事において培った知識や技術、そして組織力といった要素が、父親の会の活動の中で存分に活かされている。これと同様の話は、D 小学校に限らず、他の多くの父親の会でも聞くことができた。父親たちがもてる力を結集し、学校教育などではなしえない試みを実現しているのである。

イ　しめ縄作りの支援

父親の会が独自の活動を行ない、それが学校教育を支えている取り組みもある。H 小学校では、総合学習の一環として、毎年正月の前に 6 年生全員がしめ縄飾りを作っている。そこで、同校の父親の会は、11 月半ば頃になると、小学校区の周辺にある山へ出かけて行き、しめ縄飾りの材料となるウラジロを取ってくるという役割を担っている。このほかに必要な材料として、ワラがある。そのため、9 月下旬から 10 月上旬頃、PTA 役員の母親たちが地域の住民から、刈ったばかりのもち米の稲を軽トラックいっぱいにもらい受け、それらを干して乾燥させておく。さらに、PTA の役員らは、あらかじめ地域の老人クラブの人からしめ縄飾りの作り方を伝授してもらい、しめ縄作りの当日は老人クラブの人とともに、6 年生の指導にあたる。このように、父親の会、PTA 役員の母親、それに地域住民らの見事な連係プレーに支えられて、毎年 6 年生はすばらしいしめ縄飾りを作り上げ、新年を迎えることができるのだ。「よくぞ、こんな手間暇かかることをやってくださるなと思って、本当に感謝しています」とは、校長の言葉である。

ここで取り上げてきた活動以外にも、父親の会が親子で行なう活動では、大勢で、しかも父親たちが主体となるからこそ強みを発揮できる様々な取り組みが展開されている。それらの活動は、「自然とのふれあい」、「もの作り」、そして「力仕事」といった要素を含むものが少なくない。父親が得意とするそうした分野での活動を通して、父親自身が存分に楽しみ、かつ、自分の子どもを含む多くの子どもたちと密接にふれあうことができるのである。

2. 父親のみで行なう活動

（1）会合

原則として、父親の会のメンバーだけが参加する活動に、定期的あるいは不定期に開催する会合がある。

ア　定例会

A 小学校の父親の会は、毎月第 3 土曜日の夜に定例会を実施している。学校で開か

れるこの会には、メンバーのほかにも、校長や教頭、PTA 会長らが出席する。議事の進行は毎回ほぼ一定で、開会のあいさつ、メンバーの一人による小噺の披露、それからイベントなどに関する打ち合わせや、あるテーマに沿った討論が行なわれる。

2006 年 11 月の定例会に、筆者も同席させてもらった。このときの討論のテーマは、「いじめについて」である。自分の子どもがいじめられた、あるいはいじめた経験があるかどうか、いずれかの経験がある場合は、そのとき父親として、自分はどのように対処したのか、あるいは対処すべきだったのか、といった内容の話が熱心に語られた。中には、自分自身が学生時代に深刻ないじめに合い、それをどう乗り越えたかについて具体的に話す人もいた。また、教頭からは、学校におけるいじめの現状やそれに対する取り組みが説明された。今日のいじめについて考えてみると、いつ誰がそれに巻き込まれてもおかしくない状況にあり、決して他人事で済まされる問題ではなくなっている。それだけに、参加者の表情は真剣そのものであり、率直な意見が飛び交った。このような議論が、他の父親と関心や悩みを共有しあい、経験者からのアドバイスをもらい、また学校での子どもたちの様子や学校側の意見を知る機会として、重要な役割を果たしているのである。

イ　討論会

このほかの会合として、C 地区の父親の会が 2006 年 11 月に開いた討論会へ参加する機会も得られた。この日の会合の趣旨は、小・中学生の子どもをもつ親として、どのような C 地区を未来に残したいかについて議論するため、C 地区内に建設予定である市の公的施設について勉強するというものである。まず、ゲストとして招かれた市議会議員から、どのような施設が作られる予定なのか、またなぜこの地域が建設予定地として選ばれたのかといった内容が説明され、その後、質疑応答と自由な意見交換が行なわれた。施設の建設が始まれば、大型トラックが C 地区内を頻繁に行き来することになる。それが地域住民の生活に与える影響は計り知れない。そうした問題への対応策は、万全なのか。また、そもそも本当にその施設の建設が必要なのか。必要なら、どんな施設を作ることが住民のためになるのか。これらはいずれも、C 地区の住民である会のメンバーの生活に直結する問題であり、白熱した議論が展開された。

この父親の会のメンバーには、このコミュニティに深い愛着をもって暮らす人が多い[6]。メンバーに協力してもらった自由記述形式のアンケートでは、会への参加を決めた理由として、「地域の活力アップのため」、「地域のために貢献したい」と書いた人が非常に目立った。今回の討論会は、父親として、住民として、自分たちがC地区のために今後なすべき事柄を改めて検討する場となった。また、忌憚のない意見を交換することで、互いをより深く理解する契機ともなっていた。

[6] C地区では、毎年秋に、地域をあげての盛大な祭りが執り行われる。祭りの準備は何ヶ月も前から始められ、子どもから大人まで、大勢の住民がそこへ参加する。C地区の父親の会のメンバーが、コミュニティに対して強い関心と愛着をもつ背景として、こうした祭りの存在が大きな意味をもっていると考えられる。

（2）飲み会

すぐ前で述べたような会合の後に、ほぼ必ず開かれるのが、「飲み会」である。改めて言うまでもないが、飲み会の目的は、まず何よりも親睦を深め、みんなで楽しい時間を過ごすことであるので、普段よりもさらに打ち解けて語り合える絶好の機会となる。学校の教員が飲み会に参加する父親の会もいくつかあり、中には、年度替わりに校長や教頭が離任あるいは着任するたびに歓送迎会を開く父親の会もある。ある校長は、次のように述べている。

飲み会はおもしろいですね。「次はいつかな」と思っています。話題はスポーツから政治まで、本当に豊富ですね。そこから仕事につながるということは余りないかもしれませんけど、やっぱりお互いにどこかで助け合える仲間ができるというのはいいですね。自治会などであれば、同じ地域に住んでいる者同士、「よろしくお願いします」みたいなところがありますが、もう一歩、プライバシーに入り込むということは、やっぱり皆さん、ご遠慮なさるんじゃないかなと思うんですよ。「おやじの会」は、子どもの教育も原点にありますけど、もう一歩乗り越えて、いろんな趣味とか、そういったところでわりと忌憚ない意見が言えますね。

この語りからは、関心事や趣味を媒介として、父親同士、そして父親と校長が、職業や立場を超えた親密な関係を築き上げている様子がうかがい知れる。

このほかに、父親だけでハイキングに出かけ、自分たちで取った山菜やサワガニなども使い、野外料理を楽しむ父親の会や、「ダンスチーム」を結成して練習を重ね、参加した地元のフェスティバルで大勢の観客から拍手喝采を浴びた父親の会もある。飲み会にしろ、これらの活動にしろ、何よりも各メンバーが会への参加を存分に満喫していることは間違いないだろう。このときは、「父親」や「地域住民」としてではなく、ともに「生活を楽しむ者」同士としての絆が結ばれる。こうした要素までを含んでいることが、父親の会の最大の魅力であるといっても、決して過言ではないのだ。

この第 4 節では、多くの父親の会が、様々な交流活動を通して、まず父親自身の大きな充実感を味わう場となっていること、そして、自分の家族や他の父親、さらに学校、コミュニティとより緊密な関係を形成する契機となっていることについて、述べてきた。では、こうした父親の会の活動は、個々のメンバーの意識や生活に対し、どのような影響を与えているのだろうか。第 5 節以降では、この点についてもう少し丁寧に掘り下げてみたい。

なお、これから使用する個人名はすべて仮名である。また、対象者の語りの中にある（　）は、読者の理解を促すために筆者が加えたものであることを、あらかじめ断っておく。

第 5 節　家族との関係

父親の会の活動には、親子で行なう取り組みを通じて、わが子との関係を見つめ直す機会が多い。また、他のメンバーが築いている家族関係の話を見聞きし、自分は父親としてどのような役割を担うべきか、模索を始めることも少なくないようだ。以下で紹介する父親は、その好例を示している。

1. 広田正明さんの事例

広田正明さんは、1968 年に兵庫県 L 市で生まれた。県内の大学を卒業した後、宅配便の会社に就職して大阪へ転居。その後、物流関係の会社へ転職して、神戸、東京、香港と転勤を繰り返した。香港には妻子とともに移り住んだが、妻が海外での暮らしを好まなかったため、再び兵庫県内にある今の会社へ転職した。現在は M 市で、妻、小学生の子ども 2 人と生活している。

香港にいた頃は、日本人の少ない職場で現地スタッフと効率よく仕事をこなすための経営管理や、日本人同士の異業種交流などに対する強い関心があり、「この地域の物流分野で、5 本指に入るエキスパートを目指していた」という。日本の会社に移ってからも、ビジネススクールに通い、仕事に役立つネットワーク作りに余念がなかった。

そんな広田さんが、なぜ A 小学校の父親の会に入会したのかといえば、「妻が勝手に申し込んでいた」からである。しかし、今はすっかり「はまっている」。しかも、父親としてのあり方や仕事に対する考え方までが、大きく変化したという。

最初（父親の会へ）行ってみると、いきなり議事録とか会議次第とかあって、「えらいまじめやな」と思ったんですよ。その頃は土曜日に仕事が休めるかどうかわからない状態だったんで、「やるんやったらきっちりやらんと、失礼やな」と思ったんですわ。1 年目ははっきり言って、ほとんど行ってないですね。2 年目にやるかやらんかって話になって、もう正直、「やめとこう」思うてたんですよ。でも、行ったら何かおれるような雰囲気やったんで、まぁ、2 年目から、今後はちゃんと続けるというふうにしました。

今の会社に入ってしばらくは、結構土曜日も出勤することが多かったんですよ。でも、第 3 土曜日は夕方遅くまで会社におったらここ（父親の会）にでられませんから、（職場に）若い人間入れてちゃんと仕事を任せられるようにして、子どものためにこういう（父親の会の）活動ができる時間をきっちり作るようにしました。たとえば、今度の(A 小学校の)祭りなんかでも、その準備とかせなアカンいうたら、やっぱりそれだけの時間を確保せないかんわけで、会社の仕事を無制限に受けるわけにいかないんですよ。自分が休みたいときに休めるよう、任せられることは任せていくという体制作りを、率先してやりました。

（実際に、父親の会の活動に参加して）その子の父親というだけでなく他の子どもとも一緒に遊んであげたり、祭りとかで何かを提供したり。祭りでおやじが屋台やってる姿見て、子どもは喜ぶんですね。そういうのがモチベーションにな

ります。そんな姿を子どもたちに見せるのは、すごく楽しいですね。働いているところを見せるって意味と近いのかな。会社で働いているところを見せてもいいんですけどね。地域社会の中だと、子どもから見えるところで、父親っていうのがはっきり存在する。自分の親だけでなくて、そういう役割をもって存在するってことを（子どもに）見せたいし、そうでありたいと思っている。

父親会以外にも、この地域の方たちは、夏のプールの管理人だとか、野球のコーチだとか、学校のスポーツ活動の係だとか、児童館のイベントとか、何かやっています。そういう方たちを見て、「自分も」ってのは、すごくありますね。うちのおやじは、（広田さんが）小さい頃、別に地域の中へ出たわけじゃない（地域で活動していたわけではない）ですから、そんな考えは、どっちかというと、今住んでいる周りのお父さん連中のやっていることに影響されている方が大きいですね。

これまでは、どっちかっていうと、自分自身の向上しか考えてなかったですね。向上すれば、よりよい職場で、よりよい賃金を得ることができて、よりよい生活ができる。だから、履歴書にエエこと書けるような職場になるように選んできたし、たとえば語学だとかパソコンの利用だとか、そういうことは結構貪欲にやってきたし、マネジメントの勉強なんかもそうですね。かなりいろいろと、がつがつやってきています。今は、それを「ちょっとアウトプットしたいな（力を発揮したいな）」って思うようになってきました。

香港にいたときは、エキスパートとして名を馳せることも夢ではなかったですから。当時はキャリアアップってのをすごく意識してやっていたんですが、今はそういう気はあんまりないですね。すごく欲がないんだけども、「定収があったらそれでエエかな」と。家内は文句言うてますけどね。でも、そうしてたら（キャリアアップを目指していたら）、家族との生活は全く別のものになっていた。そっちの道を選ばんかったってことです。自分は会社の人間関係と繋がっているけど、家族は会社と繋がってないですよ。だから、家族が暮らす環境と繋がるこっち（父親の会）の世界と関わっていきたいと思っている。大方のおやじさんたちも、誘ってみたら結構そういう思いはあると思うんですよね、家族の暮らす社会ときっちり関わっていきたいって。機会さえあれば、絶対来ると思いますよ。

いいのか悪いのか、非常に今の生活には満足してしまっていますね。子どもが大きくなった頃、多分、何かやりたくなるときがくると思うんですけど、そういうときは何でもやれるような気がしています。気がしているだけですけどね。僕はもともと香港からこっちへ帰ってきて、家族と生きようというのがやっぱり根っこにありますから、そのための生活の舞台というのは大事にしていきたいと思っています。家の中でも、地域社会でも、いろいろやりたいなと思います。

2. 父親の役割を考える

広田さんは、妻に背中を押されて父親の会に入った結果、大勢の子どもたちとふれあう楽しさを知る。そして、父親としてだけではなく、コミュニティの一員としての

役割をもち、そこで働く姿を子どもに見せたいと思うようになったのである。ここで興味深いのは、そうした考え方を、自分の父親の姿から学び取ったのではないということだ。彼は、多くの父親が地域の子どもたちと深く交流するような活動に携わっている状況を目の当たりにし、そこからコミュニティとの密接な関わりをもとうという意識を醸成させたのである。

また、そうした志向性が生まれたことで、職業人としての自分を高めることに情熱を注いでいた生活へ歯止めがかかった点も、おおいに注目すべきだ。もともと家族を大事にしたいという思いは強かったが、以前は仕事から高収入を得ることで、家族との生活をより充実させたいという思いが強かった。ところが現在では、家族の暮らすコミュニティと深く関わることによって、家族に幸せをもたらしたいと考えるようになったのである。同じコミュニティで生活する父親たちとの交流が、このような変化を促したといえるだろう。

また広田さんは、少し立ち止まって職業生活をより広い視野から捉え直すことで、今後の人生設計についても考えをめぐらせるに至った。現在、団塊世代の大量退職が始まり、第 2 の人生をどのように過ごすかに関心が集まっている。広田さんのように、現役時代から将来を見据えた取り組みを行なうことで、後半の人生をスムーズに開始させ、それを豊かなものにしていくことができるのではないだろうか。

第 6 節　学校との関係

父親の会が行なう活動は、学校で行なわれることが多い。また、会の活動に学校の教員が加わったり、逆に父親らが学校の活動に協力したりという機会もある。第 4 節で取り上げた、H 小学校の 6 年生が実施するしめ縄作りの支援は、その一例である。このほかに、F 小学校では、毎年夏休み中の日曜日に開かれる「愛校デー」で、父親たちが校内や学校周辺の雑草を駆除したり、洗濯した教室のカーテンを取り付けたりして、活躍している。また、D 小学校では、運動会の際の父親たちの働きが学校側から感謝されている。

> 学校も、おやじの会のお父さん方がいると助かります。力強いんです。何かお願いするときでも、サッと動いていただけますし。特に感心するのは、運動会のときです。ここの運動会するとき、苦情がいっぱい来るんです。何でかと言いますと、父兄が近所のあっちこっちに車を停めるので、近所の方が車を（車庫から）出せないんですね。そのとき、（会の）メンバーの方が「朝、私ら行ったろう」言うて、門のところにパーッと立ってくれますよ。「そこに駐車したらアカン」言われたら、誰も停めない。ほんと裏方の仕事。学校はそこまで手が回らへんですからね。こういうふうに学校を支えてくれる方々が増えてくると、学校としても本当に有難いですね（D 小学校校長）。

父親の会が学校と連携を図ることは、学校運営に対する力強い支援となりうるので

ある。では、父親の会のメンバーにとって、学校との深い交流はどんな意味をもつのだろうか。

1. 白石孝介さんの事例

白石孝介さんは、1966 年に兵庫県 M 市で生まれた。高校を卒業すると、小売業の会社に就職。それにともない、県内で 1 度転居、それからさらに大阪府内へと移り住んだ。その後、1995 年の阪神・淡路大震災を機に、白石さんが生まれ育った町へ戻り、現在は母親、妻、子どもの 4 人で暮らしている。仕事に関しては、これまで 2 度の転職を経験し、今はトラックによる商品の配送を行なっている。

白石さんは子ども時代に、自分の父親と何でも話せるような関係を築くことができなかった。そんな経験から、自分の子どもに対しては「あるときには父親で、あるときは友だちでいたい」との思いが強く、その手がかりを得るために A 小学校の父親の会へ参加した。その結果、以前は全く想像もしなかったほど、学校との関わりを深めることになった。

（自分の）父親は昭和ひと桁の人やったからね、黙っとっても威圧感があるというか。「しゃべったら、何かいわれるのちゃうか」とか。父親は工場で三勤交代の仕事をやっとったんですよ。夜勤明けとかなったら、僕らが学校から帰ったら寝ててね。母親から「（お父さんは）夜、自分らが寝てるときまで仕事してくれてんねんから、うるさくしたらアカン」とか言われて。だから、ふだんは父親と一緒に遊ぶということはなかったです。でも夏休みには、鳥取砂丘とかよう連れて行ってもらいましたね。父親には、あいさつのことを厳しく言われた。それから、僕が長男やったんで、「父親がおらんときに、男はお前とおじいちゃんしかおれへんねんから、しっかりせえよ」みたいなことも言われた。それでも、どういう行動に出たら、しっかりするということなんか、わからへんかった。父親ともっと気軽に話したかったですね。めちゃくちゃ話したかったですね。酒が飲まれへんというのも、弱点やったなと思うんです。ちょっとは飲んどいてほしかったなと今は思うんですけどね。（少し前に亡くなった父親と）一緒に飲みたかったですね。

自分の子どもには、僕のような経験をあまりさせたくないから、子どもが好きなポケモンの名前を全部覚えられますし、「おれ、映画の券を買ってくるから、一緒に行こうや」って誘います。同窓会で会った友だちで、「俺は家の中で（子どものために）別に何もせえへん。厳しい親やで」とかいうやつもおりましたけど、「それは違うで」と。僕も、（親の厳しさを）体験してなかったら、逆に厳しくなってたかもしれないけど。そういう意味でも、（自分と父親の関係を振り返ることは）「父親」について考えるきっかけになりますね。

僕は子どもが生まれたら、こっちから聞かんでも何でも話してくれる子どもになって欲しかったんです。だから逆に、僕も学校のことが知りたいし、子どもの友だちのことも知りたい。そうじゃなかったら、受け入れの態勢ができないでしょう。おやじはそんなことに無関心だったといったら失礼だけど、仕事でいなか

ったので。今、うちはオープンな方で、「誰でも遊びに来てよ」という感じなんですね。だから子どもの友だちも、ほんまに小さいときからよく知ってるし、その両親も知ってるから、家族ぐるみの付き合いが多いですね。

父親の会も、そんな感じで、自然に「入ろう」と思いました。子どもが一人なので、「何かあれば参加したい」という感じで。それで、僕自身も得るもんがあれば嬉しいですしね。たとえば、同じ学年で、近所の誰々が悪いとか、そういう情報も入ってきますし。僕としては、学校の先生に、子どもだけではなく、その親というのも知っておいてほしいんですよ。でも、父親は学校と接する場というのが、ないじゃないですか。だから、そういうの（父親の会）を利用すれば、こっちからアクションをかけられる。

（会に）行ってみたら、教頭先生とか校長先生が来てて、びっくりしました。でも、「この学校は真剣やねんな」という感じが僕ら自身に伝わってきましたね。ひとつ前の教頭先生もすごくよかったですよ。去年の暮れから、「新年度に教頭が替わるらしいで。どんな人が来るんやろうな」いう話、僕らはいっぱいしとったですよ。ふたを開けたらエエ先生で、びっくりしましたけど。そういう情報は、嫁はんより僕のほうが詳しいですよ。（父親の会の定例会があった）次の日に、嫁はんが「どんな話やったん？学校の最新情報を教えてよ」とか、聞いてきますからね。僕は、校長や教頭と話す場があるから。

昨日の土曜日は、昼間に PTA の卓球大会があって、嫁はんは来なかったけど、僕だけ参加したんです。そしたら教頭先生が来てたから、「教頭先生来てるで」って、途中で嫁はんを呼んで。教頭先生が「白石さん、卓球しますの？じゃあ、勝負しましょう」いうて話しかけてくれたときに、「あぁ、これ嫁ですわ」と（紹介した）。教頭先生の前で、嫁はんに「普通にしゃべってるのが教頭先生やで。ほんま、めっちゃエエ先生や」と（話した）。他の先生とも気軽につきあえます。今、うちの子どもの担任してくれてる先生がまた、すごくいいんです、ものすごく。うちの嫁はんも僕もすごく好きやし。「先生の授業を 1 回受けたいわ」いうて、僕も思うんです。嫁はんは、連絡帳に交換日記みたいな感じで書いてて。僕もたまにそれを読んで、「エエなぁ、おれもちょっと書くわ」いうて、書いたりしますね。

嫁はんとは、互いの仕事の話をしないです。「忙しかった」とか、そういうぐらいですね。職場のことを知ってくれてるんやったら、言いますけどね。（知らなかったら）言っても愚痴になるだけやと思いますから。聞いてもこないし。学校のこととか、子どものこととか、そんな話題でもっているようなものですね、うちは。

2. 妻や子どもと関心を共有する

白石さんの事例では、父親の会への参加を通して、彼が小学校教員に対する親近感を覚え、教員との距離を縮めていく過程がはっきりと示されている。また、会の中で妻よりも先に「学校の最新情報」を得られること、そして、妻よりも校長や教頭のことをよく知っており、校長や教頭にも顔や名前を覚えてもらっていることについて、

誇らしい気持ちさえ抱いている様子が見て取れるだろう。

さらに、このような学校との深い関わりが学校に関する話題を豊富にし、それが妻との豊かなコミュニケーションを促す要因となっている点は、看過できない。また、語りの中ではあまり触れられていないものの、学校への関心が妻だけではなく、子どもとの共通の話題になっていることは、ほぼ間違いないだろう。子ども時代を振り返ると、今は亡き父親とは親密に語り合える雰囲気やその機会もなく、父親から「しっかりせえよ」と言われたところで、具体的にどう振舞えばよいのかを尋ねることすらできなかった。その白石さんが、学校という子どもの生活環境について理解を深め、積極的に子どもとコミュニケーションを図ろうとする姿を、白石さんの子どもは大人になるまでずっと記憶に留めておくことだろう。

第 7 節　コミュニティとの関係

父親の会に参加する父親の中で、参加当初からコミュニティとの関係を意識している人はそれほど多くない。すでに PTA 役員などを務め、コミュニティとの繋がりの大切さを実感しており、父親の会の立ち上げにも関わったような人はともかくとして、ほとんどの父親は、そうした意識のないままに参加し始める。だが、聞き取り調査では、父親の会でメンバー同士や子ども、そして地域住民らとの交流を続けるうちに、「コミュニティに対する考え方が大きく変わった」と語る父親が、何人もいたのである。彼らの意識は、いかなる契機から、どのように変化していくのだろうか。

1. 河合圭吾さんの事例

河合圭吾さんは、1967 年兵庫県 N 市生まれ。実家は市場の中にあり、子どもが悪いことをすれば、近隣の人たちから注意を受けるような環境で育った。現在は、IT 関連の企業に勤めており、O 市で妻と小学生の子ども 2 人と一緒に暮らしている。

第 3 節でも触れたとおり、河合さんが参加する I 町の父親の会は、小学生の登下校時における見守り活動と挨拶指導に力を入れている。彼がこの会に参加した直接のきっかけとは、妻が I 町の子ども会で役員を務めていたことである。結成されたばかりの父親の会が、老人会と子ども会に連携をもちかけ、「子ども会からも、誰か若いお父さん出して」と要請したのだ。河合さんは、「なんで、僕が出るんかな？」と思いながら、第 1 回目の定例会に参加したという。

河合さんは、会社で社会貢献を進める部署に所属する。その活動の一環として、現在、兵庫県教育委員会から得た資金を活用し、O 市内にある県立高校で、I 町地区の集会所のパソコンを使った利用予約システムの開発に協力している。この事業は、地域社会との結びつきを進めたい高校（兵庫県）と、利用予約方法の利便化を図りたい集会所と、積極的な社会貢献を行ないたい企業の、三者の要求がうまくかみ合って実現したものだ。河合さんの場合は、企業の一員としてこの事業に携わっているわけだが、父親の会と関わる中で、「コミュニティ参加」について考えをめぐらせてきた経験が、その事業活動にも影響を与えているようである。

（父親の会には）なんか知らんうちに入ったという。忙しい時期でしたのに、なんかよう分からんうちに、第 1 回の定例会に参加しました。池田小の事件もあったし、誘拐もよくありましたので、子どもをもつ親として、「弱い面がある」と（気づいた）。その弱い面を家族だけで守れる世の中じゃないっていう意識も強かった。だから、そういう（子どものための活動の）必要性というのは痛感していたんですけど、やっぱり「仕事をもちながら活動するのは無理だろうな」と思っていました。でもまぁ、詐欺にあったようなもんですから、私もひょっこり会に参加したんです。

初めて参加したときは、「定例会って、誰が中心となって、何のために話し合いしてるんだろう」とか、さっぱり分かりませんでした。そんなさなかに、皆さんが色々と自分の生い立ちをお話しされる機会がありましてね。そのときに、戦争体験であるとか、「昔から考えたら、こんな（父親の会の）活動は当たり前なんだよ」というような話しを聞いて、「そういう話が聞けるだけでも、おもしろいね」と（思った）。今まで自分の身内の戦争体験は聞いたことがありますけど、いろんなお年を召した方のお話をあまり聞いたことがなかったんです。「地域という狭い中で、いろんな人がいろんな体験の上で行動されているんだな」というのを感じました。

それまで歳いった人は「別世界の人だ」と思っていました。ところが、（話を聞くうちに）「歳いった人は経験の宝庫だ」と（気づいた）。こんなことを言うのもナンですけど、つまらん定例会の中でも、お年を召された方のこれまでの経験をもとにした「技」が、随所にちりばめられているんですよ。会社というのは、同じ年代で、同じような文化と同じような趣味をもち、同じ仕事をしている人間の集まりなので、偏りがあるんですね。だから、ちょっと違うところに入って、今までに感じたことのないようなものをうっすらと感じることができたというのが、これまで継続してきた理由だと思います。

これまで何度かボランティア活動をしたことがありますけど、「何かボランティアをしないといけないんだよ」と漠然とした意識でやっていたところがありました。でも、実際に（父親の会の）活動へ参加してみると、目的意識も明確だったんです。人間どんな人でも、必要性がきちっと理解できたら、それをしっかりやるんだと思うんです。だから、情報がちゃんとキャッチできることが必要かなと。昔の奥さん方の井戸端会議じゃないですけど。

（I 町の父親の会の活動に対して）子どもをもっている家族の方々の感謝の気持ちは、すごく大きいんです。でも、その声というものはインターネットを使ってとれるかというと、とれないんですね。している町内でインターネットをオープンにして、誰かからの投稿があるかなと思ったんですけど、それほどなかった。やっぱり情報は、人と人が集まって、何かムダ話をしながらでも伝わってくるものなんだなという気がします。だから、定例会も重要だなと。僕は、なるべく父親の会の場でそれ（みんなの感謝の気持ち）を話そうと思うんです。ちゃんと情

報が伝われば、活動の意味合いも大きくなってくるので、これは多分、好循環を迎えると思うんですね。

I 町では、朝、（子どもの見守りのために）通学路に立ったり、パトロールをするお母さんたちの愛護の負担が減っているんです。I 町以外の小学校区のお母さんたちって、なかなか愛護委員のなり手がいない。でも、ここは父親の会があるから、「愛護もそんなに負担にならないよね」って。だから、「じゃあ、私がなるわ」という人が出やすいというメリットもあります。子どもを守りたい気持ちはあっても、それを一手に引き受けるのは、すごく負担なんですね。「父親の会の人も立ってる」という安心感があれば、なにか人に頼れる（ことを知る）。そういうありがたみって、だんだん伝わりますよね。実際に活動が誰か子どもを守ったというわけじゃないんだけど、こういう間接的な話がいっぱい出てくると、「これはホンマものだな」というのを感じ取れるんでしょうね。

最近、「人間はみんな、『人の役に立ちたい』という気持ちをどこかにもっているんじゃないか」という気がするんですよ。多分、まちの中には、いろんな特技をもった人がいて、その人たちが集まったら、すごいことになるでしょうね。防犯に対してすごい知識をもっている方がおられるかもしれない。そういう方が、インターネットという IT を使って、何か情報を出していただくだけでもいいかなと。実際に参加しなくても、薄く参加できるような場が提供できたらいいと思うんです。だから、活躍の場とそれができるようなやり方の工夫が必要でしょうね。昔のやり方ばっかりじゃなく、今風なやり方も取り入れて。そうすれば、社会環境って変わっていくんじゃないでしょうか。

この前もいろんな人と話していて感じたんですけど、たとえば会社の中で、自分がどれだけ貢献できているかを感じることこそが、行動を起こすモチベーションを高めるんじゃないかと思うんです。今の社会は誰のためになっているかがわからないことって多いですよね。（パソコン操作の講義をしている）高校生にも、「自分のためにこれをやるんだよ」というよりも、「これはこういうふうに人のためになるんだよ」と伝えたほうが、取り組んでもらいやすいんじゃないかという気がします。そのあと、達成した喜びを感じ取れれば、今後社会に出ても、こういう社会活動に繋がっていくんでしょうね。

2. コミュニティで子どもを守る

河合さんの事例は、父親の会とコミュニティの関係を考える際に、多くの示唆を与えてくれる。

まず、人が顔と顔を合わせる場の大切さについてである。河合さんの場合は、父親の会が開く定例会に出席し、そこで同じコミュニティに住む異世代の人々から直接話を聞く機会に恵まれた。同質的な職場では感じることのできないような話の「面白さ」が、河合さんにとって、父親の会の大きな魅力となったのだ。また、河合さんは、人と人が「ムダ話」をしながら、情報を交換し合うことによって、活動の目的意識が明確となり、さらにそれによって、活動に対する個々の動機が高まるというメカニズム

も、そこから学び取っている。このような事実を知ったということ自体も、河合さんが感じる「面白さ」のひとつとなっているのだろう。

それから河合さんは、父親の会が見守り活動を地道に続けることにより、愛護活動を担う地域の母親たちから感謝されるだけではなく、委員を引き受ける母親も増えているという相乗効果も指摘した。このように、父親の会の活動がコミュニティにおける活躍の場となっている点、その活動がどのような社会貢献を果たしているのかがはっきりと自覚できるという点、また、そこから目的達成の喜びが得られるという点は、とても興味深い。これらも、父親の会に対する河合さんの評価を高めている大きな要因だろう。さらに、父親の会への参加経験から学んだこれらの教訓が、次世代の育成活動において、おおいに役立てられている様子もうかがえた。

そして何よりも、父親の会が行なう見守り活動は、地域の子どもたちに大きな安心感をもたらしていることだろう。わが子が笑顔で登下校できるということ。これこそが、河合さんはもちろん、I 町の多くの家族にとって、かけがえのない喜びとなっているのではないだろうか。

第 8 節　「父親の会」の活性化を促す要因

本章では、父親の会がどのような背景から結成され、どのような活動を展開しているのか、そして、そうした活動が、会のメンバーにとってどんな意味をもっているのかということについて、述べてきた。最後に、父親の会の活動を活性化させる要因とは何かという点を検討し、本章のまとめとしたい。

ここまでの具体的事例を振り返り、もっとも重要な要素を取り出してみると、参加する父親自身が会の様々な活動を存分に楽しみ、そこから満足感や充実感を得られるということに尽きるだろう。第 4 節の中で、父親の会の主な活動として、親子で行なう活動があると述べたが、たとえそのような「子どものため」の活動であっても、父親自身が夢中になれるという要素が、何よりも大切なのだ。ましてや、父親だけで行なう活動がそうであるのは、言うまでもない。メンバーが「楽しい」と感じるから、活動が盛り上がる。盛り上がるから、また「楽しい」と思える。その繰り返しが会を活性化させるのだ。

では、父親たちは、どの点において、会の活動を「楽しい」と感じることができるのだろうか。

1.「父親」となる勉強の場

今回の聞き取り調査では、対象となった人の大半が、「子ども時代、自分と父親の関係はそれほど強くなかった」と語った。白石さんのように、父親と一緒に遊んだ記憶がほとんどないという人も少なくない。広田さんの場合は少し例外で、「小さい頃、おやじとよく遊んでもらったというのは、絶対覚えてます」というが、父親がコミュニティの中で何か子どもと関わるような活動に従事することはなかった。

考えてみると、現在 30 歳代から 40 歳代である対象者らの子ども時代というのは、

ちょうど日本の高度経済成長期真っ盛りの頃とぴったり一致する。つまり、対象者らは、その時期に企業戦士として昼夜を問わず働き続ける父親の背中を見て育った、ということになる。しかし、今日、多くの父親が自分の子どもとの深い関わりを求めているという状況は、すでに第 1 章で詳しく述べたとおりである。そうだとすれば、彼らは、現在自分が理想とする「父親モデル」を、彼らの父親の中に求めることができないのだ。

それに加えて、昨今の子どもを取り巻く環境の変化はきわめて著しい。いじめ問題の深刻化、子どもの安全安心をおびやかす事件の多発、携帯電話やパソコンなどの通信機器の発達といった状況に、親はどう対処すべきかが日々問われているのである。たとえば、「自分の子どもがいじめにあった場合、親はどの段階で対応に乗り出すべきか」、「子どもの安全をどう守っていくか」、「子どもに専用の携帯電話をもたせるのは、何歳からが望ましいのか」などが、親の取り組むべき課題として目の前に突きつけられる。こうした懸念事項に対し、現在育児中である親たちのさらに親の世代は、参考となりうる回答をもち合わせていない。仮に、時代を問わず、育児にともなって発生する悩みや相談事などであれば、経験者として対処方法を伝授することも可能であるが、現代的な課題にはこれまで誰も直面した経験がないのである。よって必然的に、今日の父親は、これらの課題を共有し、ともに解決策を探ることのできる同世代の仲間を頼りとするのだ。

これらの事情から、父親の会は、メンバーが「『父親』となるための勉強の場」として、重要な役割を果たしていると考えられる。H 小学校の校長が、「お母さん方は、親として学ぶ場があるけど、お父さん方にはそれがないと思うんですよね」と語ったように、日常生活の中で、相対的に子どもとの接触が少ない父親は、意図的に「父親」となるための勉強をしようと志さない限り、なかなかその機会が得られないだろう。A 小学校の父親の会のように、メンバーがそれぞれどんな子育ての課題を抱えているのか、あるいは、どんな活動を行なえば子どもたちとともに楽しい時間を過ごすことができるのかといった内容を、議論する場が設けられているところでは、それが父親として学ぶ格好の機会となる。他の父親と一緒に、楽しみながら「理想の父親モデル」を模索できるという点に、広田さんや白石さんも、父親の会の魅力を感じているのではないか。

よって、会合や飲み会などを実施している父親の会では、メンバーの満足度が高くなる可能性があるだろう。

2. コミュニティにおける活躍の場

家庭や職場以外で、自分の経験、およびそこで培われた能力や知識を活用できる機会があるという点も、父親の会へ参加するにおいて、個々のメンバーに大きな充実感をもたらす一要因となっているようだ。

たとえば広田さんは、これまで効率よく仕事をこなすための経営管理や、ビジネスに必要なネットワーク作りに力を入れてきたという経験が、小学校の祭りの準備などに活かされている。彼は遊びに関する出し物の責任者として、祭りのかなり前からき

っちりとした企画書を作成し、どの学年の子どもも楽しめるような工夫や、担当者が効率よく動けて、しかも「『参加したぞ』って気になる」ための様々な方策を十分に検討していた。

また、河合さんは父親の会のホームページの作成と管理を担当している。仕事の関係上、毎日の見守り活動への参加は難しい立場にあっても、彼は会の情報を集約し、インターネットを使ってそれらを広く世間に発信するという重要な役割を担っているのである。各自の得意分野における能力を活かせば、様々な参加の形態が生まれることを示しているといえよう。

職業生活以外のこれまでの経験が、父親の会の活動の中で役に立つ機会も少なくない。たとえば、子どもの頃にボーイスカウトへ所属していた人が、父親の会のキャンプ活動の際に、マッチを使わないで火をおこすという「技」を披露して、みんなから感謝されたという場合もあった。

このように、各自が様々な経験から得たものを活動の中で存分に発揮できる、そして、それがコミュニティにおける自分の居場所を確保し、多くの人々との繋がりを生み出す源泉となるという点は、父親の会の大きな魅力だろう。また、自分の貢献によって、ある目的が達成されたり、人から感謝されたりするといったような成果が得られれば、メンバーの充実感はさらに大きくなるのではないか。河合さんが「今の社会は誰のためになっているかがわからない」と話すとおり、複雑化・多様化が進む現代社会では、自分の果たした貢献に対する成果が見えにくい。だが、小学校区や中学校区程度の地理的領域で行なう活動であれば、それらの有機的な結びつきを実感しやすい。それがひいては、次の活動への動機付けと繋がるのではないか。同時に、父親たちが各自のもてる力を結集させるからこそ、会の様々な活動を活発に展開することができるのである。

このようなメカニズムが認められるとすれば、父親の得意分野を活かすような活動内容を行なうことが、会の活性化を進める大きな要因となるだろう。そうした活動とは、「自然とのふれあい」、「もの作り」、そして「力仕事」などが、キーワードとなりそうだ。

3. 新しい世界の広がり

すぐ前で述べたように、父親の会には、様々な職業をもった人々が集まっている。会合などで、自分とは異なる職業の父親から、様々な発想や意見を聞けることに、楽しみを見出している人も多い。教員のある父親は、親子の活動内容を検討する際に、職業柄、常に「教育的効果」というものを考えてしまいがちであるが、そうした考え方にとらわれない「企業のお父さんたちならではの発想」に、新鮮味を感じているという。職業の違いだけではない。河合さんの場合は、それまで「別世界の人」であった異世代の人たちとの交流を通して、年配者が「経験の宝庫」であることに気づき、彼らの体験談から豊富な示唆を得ている様子が見て取れた。

このように、父親の会は、自分とは異なる価値観や生き方に出会う場でもある。河合さんは、多様な人々がコミュニティの中で暮らしていることを実感するようになり、

「いろんな特技をもった人たちが集まると、すごい活動ができるようになる」と考えるようになった。また、広田さんは、地域の子どもと関わる活動をする人々と出会ったことで、「自分自身の向上」を目指して職業的能力を磨こうとする生活から、コミュニティと繋がりつつ家族との絆を深めようとする生活へ、生き方の方向性を大きく変えた。聞き取り調査の対象者の中には、職業生活そのものを見直し、もっと家族やコミュニティの仲間たちと過ごす時間を多く確保するために、勤務先を変えたという人もいる。つまり、同じコミュニティで生活する多様な属性の人々と出会うことによって、次第に視野が広がっていく。それにともない、家族との生活や関係のあり方を見直したり、コミュニティ生活をもっと楽しもうとしたりするようになる。こうして、自分の生活世界が新たに拡大していくのを感じることは、父親の会のメンバーにとって、大きな喜びとなっているのだ。

そこで、父親の会の活性化のためには、多くの人に対し、広くその門戸を開くことが重要であるように思われる。様々な属性をもつ人々が会に関われるようにするため、参加資格や活動方法などを検討していくべきだろう。

以上の考察をまとめると、①父親が共通のテーマについて議論する場があること、②父親の得意分野を活かすような活動を行なうこと、③多くの人が参加できるような仕組みを整えること、この 3 点が父親の会の活性化にとって必要である。そして、父親が熱心に会の活動に取り組み、そこから大きな満足感を得ていることこそが、子どもたちに豊かな社会性を身につけさせる重要な契機となるのだろう。

第 4 章　子育て期の家族の支援に向けて

第 1 節　はじめに

本研究では、最近、子育てに対する父親の関心が高まる一方で、それが必ずしも十分満足のいくほど行動へと結びついていないという現状に注目し、父親が子どもとのコミュニケーションをもっと図るためには何か必要かを明らかにしようとしてきた。この過程で、第 2 章では、父親を対象に、子どもや家族との関わりを支援する行政や NPO などの取り組みについて、続く第 3 章では、現在、各地で結成されている父親の会の活動について取り上げ、それらがそれぞれどんな成果を上げているのかを検討した。

最終章となる本章では、行政や NPO などが実施する取り組みと、父親たちのコミュニティ活動が、子育て期の家族の課題とどう関連するのかをもう一度簡単に整理し、とりわけ後者がもつ可能性について考察したい。

第 2 節　父親と子どもの関係作り

まず、ここでの議論から明らかとなったのは、父親がもっと子育てに関わろうとするのを困難にしている要因として、従来から言われている「労働時間の長さ」のほかに、「子どもとどう接したらよいのかが分からない」という父親の課題があることだ。

この課題に対して、行政などが実施する男性セミナーや父と子の親子教室では、父親と子どもが一緒に楽しみながら過ごす場そのものを提供したり、具体的なコミュニケーションの方法を講義したりして、父親と子どもの関係作りを支えていこうとしている。ただ、こうした取り組みに参加する父親の動機は、「妻に勧められた」というものが目立っており、父親が当初から、主体的に課題と取り組もうとしたわけではなかったということも浮かび上がってきた。しかし、セミナーなどへの参加を契機として、父親たちがより主体的な子どもとの関係形成を志向するようになる可能性も見られ、父親を対象とした家族支援の取り組みが一定の役割を担っていることが理解された。

一方、父親の会は、父親が学校への関与をもっと深められる機会を作ること、父親同士の仲間作りを進めること、そして、コミュニティ全体で子どもの育成を担っていくことといった意図から、PTA 会長などを担う一部の熱心な父親たちが中心となって立ち上げたものだった。そこへ参加する父親たちの中には、「妻が申し込んだ」という理由から会へ関わるようになった人もいるが、自ら進んで入会を決めた人が多い。

父親の会の活動として、会合や飲み会、その他、父親だけが参加する親睦活動などが行なわれている場合、そこが他の父親と問題関心を共有し、相互作用を行ないながら「理想の父親モデル」を模索していく場となっている現状が見て取れた。この過程で、学校との関係を深めて、子どもとのコミュニケーションをより密なものとするきっかけが生まれたり、職業生活を見直したりする父親もいた。このように、父親の会

では、父親同士および教員との交流を通じて、父親が今日的な「父親アイデンティティ」を確立する機会を提供しているのである。

母親と比べて、「親になる」ための勉強の機会が少ない父親にとって、父親の会における父親同士の交流は、大変貴重だといえる。前述した男性セミナーや父と子の親子教室もそうした機会のひとつであるにちがいないが、父親の会における相互作用は、メンバーの間に連帯感を生み、コミュニティに対する関心を深め、親子で行なう活動を活性化させるという様々な効果も、同時にもたらしているのだ。

その親子で行なう活動についてであるが、参加した子どもたちは、活動そのものを楽しむことができるだけではない。父親がコミュニティの人々と協力し、得意分野で力を発揮しつつ、心底楽しんでいる姿は、子どもたちに協調性やコミュニティでの心豊かな生活といったものを示唆することになるだろう。そうした経験と記憶は、子どもたち自身の中に、コミュニティとの深いつながりを希求する姿勢を生み出すのではないだろうか。

第 3 節　コミュニティにおける子育て期の家族の支援：「父親の会」の可能性

父親の会の活動は、メンバーとその子どもの関係に影響を与えるにとどまらない。メンバーの貢献がコミュニティにおける何らかの成果と結びついたり、自分とは異なる価値観や生き方と出会ってコミュニティの住民の多様性に気づいたりした場合は、コミュニティに対する関心が高まる可能性がうかがえた。このとき、父親の会の活動は、その枠を超えて、「コミュニティの活動」となる。I 町の父親の会のメンバーとして、毎日小学生の見守り活動を続ける人たちが、「コミュニティ全体のお父さん」を自負するようになったのは、その象徴的な例である。この過程においても、今日的な「父親アイデンティティ」が確立される様子を見て取ることが出来る。

父親の会の活動が、コミュニティの活動として活性化したならば、コミュニティで生活する多くの子育て期の家族に、様々な恩恵がもたらされるだろう。たとえば、学校の中にビオトープを作って、そこでホタルを飼育するという活動は、子どもたちにホタルの生態や命の尊さを学ばせ、ホタルの美しさに触れる機会を与えてくれる。この活動がコミュニティの活動として、小学校の外にも広がっていくなら、コミュニティで暮らす子育て期の家族にとっては、すぐ身近なところで貴重な体験ができるすばらしい機会となるのではないか。また、I 町の父親の会が行なう見守り活動によって、通学路を通る子どもたちとその家族に、大きな安心感が生まれているということは、ここで改めて繰り返す必要もないだろう。

このような父親たちによるコミュニティ活動は、第 1 章で指摘した現代の子育て期の家族をめぐる状況にも対応しうるのではないか。

家族の「多様化」が進み、夫婦と未婚の子からなる家庭の割合が減る一方で、一人親の家庭や子どものいない家庭が増えている。だが、コミュニティ活動が活発となり、コミュニティで子どもたちを育成しようという意識が強くなれば、そこで「コミュニティのお父さんやお母さん」との関係が作られたり、自らが「コミュニティのお父さ

んやお母さん」となったりすることもできるのだ。実際に、父親の会の活動を通して、実の子以外の子どもたちにも目が行き届くようになり、実の子もそれ以外の子も悪いことをすれば同じように叱れるようになったという人が何人かいた。

また、今日は、家族の「個別化」によって、人々が家族に関する規範やそこで各成員に期待される地位－役割から自由になる代わりに、目指すべきモデルを見失い、自らそれらを構築していかなければならない時代である。コミュニティ活動における人々の交流を通して、様々な価値観や生き方と出会い、そこで参考となるモデルを見つけることも可能だろう。

さらに、家族の「不平等化」に対しては、もっともコミュニティ活動の意義が発揮されるのではないか。家庭間の経済的格差が広がる中、子どもの教育に熱心な家庭が増える一方で、子どもの養育責任の放棄に至りがちな家庭も目立っているという。こうした背景から、「家庭間の格差を最大限補完する機会」を作り出していくことが、コミュニティに求められている。コミュニティで、子どもたちに豊かな経験をさせるために展開される父親たちの活動が、そうした機会のひとつとなる可能性は大きい。

この研究では、「子ども」をキーワードとして、父親たちが職場や家庭以外の空間であるコミュニティで、新たな社会関係を取り結ぼうとする動きをすでに開始しており、その過程で、職業生活のあり方の再検討も始めているということを、繰り返し述べてきた。現在、「仕事と家庭生活の両立をいかに図っていくか」が、大きな課題となっている。この問題を考えるにあたって、父親の会の試みが大きなヒントを与えてくれるように思う。

なお、これまでに議論してきたことを、第 4-3-1 図にまとめた。

第 4 節　提言

最後に、いくつかの提言を行ない、この研究を締めくくりたい。

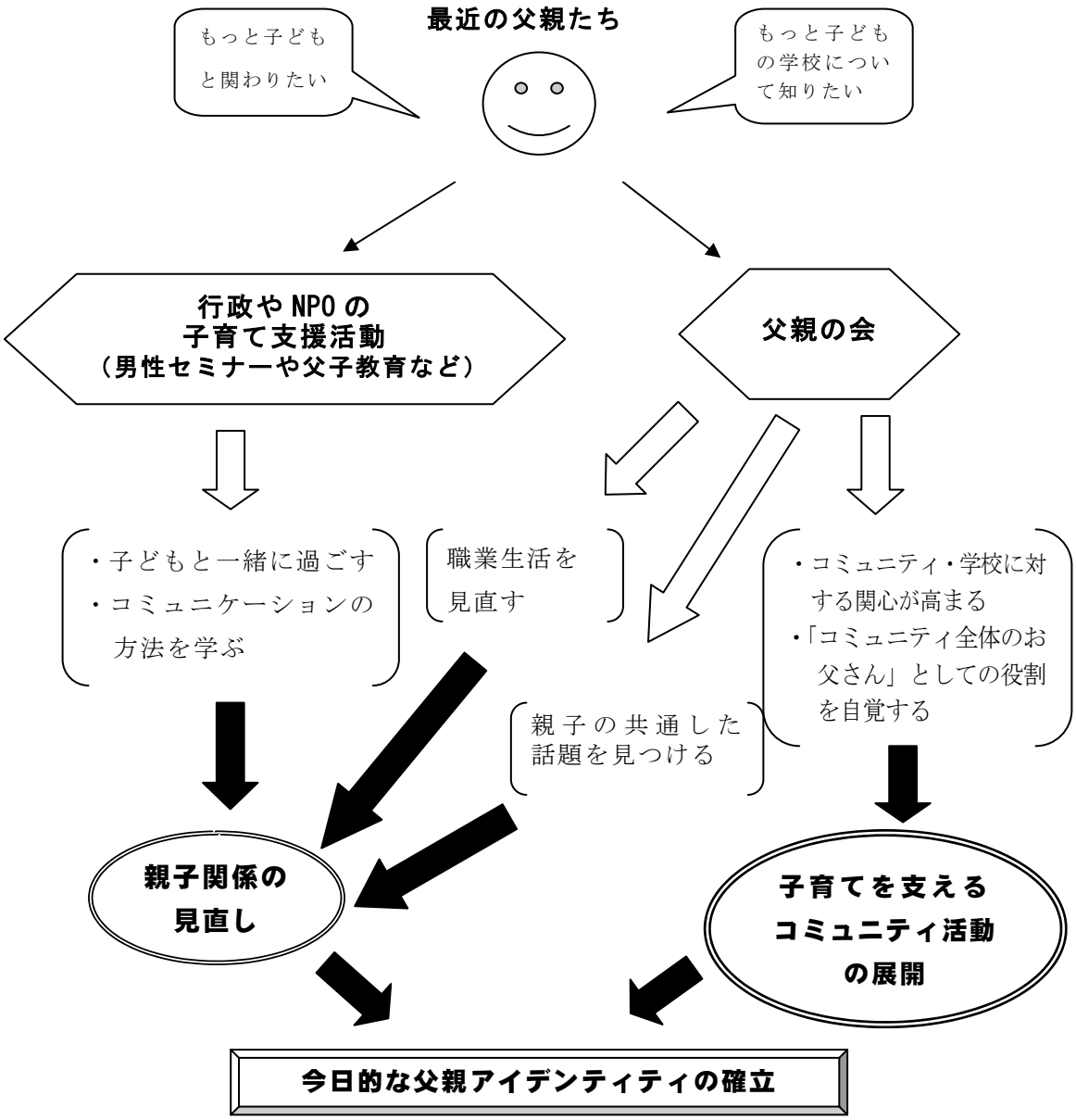
父親の会の発足に至った経緯を尋ねたとき、D 小学校の校長は、「校長が顔を合わせるある会合で、父親の会を立ち上げた学校があると聞いたのがきっかけ」と説明した。また、C 地区の父親の会は、市の施策として始まった小学校の父親教室が基礎となって発展した会である。このように、父親の会の立ち上げには、何らかの公的な取り組みが有効であると考えられる。

たとえば、京都市教育委員会では、「創意工夫を凝らした家庭教育の支援」の一環として、「おやじの会」の活動支援を行なっている。その目的は、父親の教育への参加を促し、教育に対する関心をさらに高めてもらうことにある。現在（2007 年 2 月 21 日時点)、市内には 167 の「おやじの会」がある。教育委員会は、全市的な連絡組織である「京都『おやじの会』連絡会」の事務局を担当し、イベントの際の会場手配やホームページの管理などを行なっている。ホームページには、「『我が子の父親』から『地域のおやじ』へ」をスローガンにした「おやじ宣言文」やイベントのお知らせのほか、各おやじの会の活動風景の写真などが掲載されており、互いに他の会の活動内容を参

考にすることができる。

このように、父親の会による取り組みが行なわれ、一定の成果もあげている様子を伝えていくこと、それから、父親の会のネットワーク作り支援と、情報交換の場の提供により、それぞれの会の活性化を支援すること、これらが方策として求められるだろう。

第 4-3-1 図　子育てを支える取り組みと父親の会の活動がもたらす効果



引用文献

天野正子　1998　「子どもを映す『文化と社会』―あいまいな空間の創生―」佐伯胖他編『ゆらぐ家族と地域（岩波講座　現代の教育　第 7 巻)』岩波書店、p.3-27

独立行政法人労働政策研究・研修機構　2005　「日本人の仕事観、社会意識の変化」『ビジネス・レーバー・トレンド』2005 年 5 月号、p.2-8

平田裕美　2005　「『父親の会』活動の意義と機能」日本子ども社会学会『子ども社会研究』11 号、p.86-99

礒田朋子・清水新二　1991　「家族の私事化に関する実証的研究」『家族社会学研究』3、p.16-27

礒田朋子　1996　「家族の私事化」野々山久也他編著『いま家族に何が起こっているのか』ミネルヴァ書房、p.3-27

木本喜美子　1995　『家族・ジェンダー・企業社会―ジェンダー・アプローチの模索―』ミネルヴァ書房

――――　2006　「雇用流動化のもとでの家族と企業社会の関係―企業の人事戦略を中心に―」『家族社会学研究』第 17 巻第 2 号、p.17-28

北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”　2003　『平成 14 年度　ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書』

厚生労働省　「平成 17 年国民生活基礎調査の概況」
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa05/index.html（2007 年 3 月 19 日最終確認）

倉沢　進　1977　「都市的生活様式論序説」磯村英一編『現代都市の社会学』鹿島出版会、p.19-29（1985 年、鈴木広他編『リーディングス日本の社会学 7　都市』東京大学出版会、再録）

――――　1998　『コミュニティ論』放送大学教育振興会

松田茂樹　2006　「企業における仕事と家庭生活の両立支援策―企業の施策と就労者のニーズ―」第一生命経済研究所『ライフデザインレポート』2006 年 7-8 月号、p.4-15

内閣府大臣官房政府広報室　「国民生活に関する世論調査」（平成 13 年 9 月調査）
http://www8.cao.go.jp/survey/h13/h13-life/index.html　（2007 年 3 月 19 日最終確認）

――――――――――――――――「国民生活に関する世論調査」（平成 18 年 10 月調査）
http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-life/index.html　（2007 年 3 月 19 日最終確認）

長津美代子　2004　「変わりゆく夫婦関係」袖井孝子編著『少子化社会の家族と福祉』ミネルヴァ書房、p.14-25

NHK 放送文化研究所編　2004『現代日本人の意識構造〔第六版〕』日本放送出版協会

――――――――――――― 2006 『日本人の生活時間・2005―NHK 国民生活時間調査』日本放送出版協会
日本「おやじの会」連絡会ＨＰ http://www17.plala.or.jp/nippon-oyaji/index.html（2007 年 3 月 19 日最終確認）
野沢慎司 1995 「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク（21 世紀の都市社会学 1）』勁草書房、p.175-233
白波瀬佐和子 2006 「不平等化日本の中身―世帯とジェンダーに着目して―」白波瀬佐和子編『変化する社会の不平等―少子高齢化にひそむ格差』東京大学出版会、p.47-78
多賀 太 2006 『男らしさの社会学―揺らぐ男のライフコース』世界思想社
吉岡亜希子 2006 「地域づくりにつながる父親の子育てグループ活動」「月刊社会教育」編集委員会編『月刊社会教育』605 号、国土社、p.26-31